

放送人の会

No.79

2017.10.27

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel.&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.com発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉
菅野高至 (HP担当)、逸見京子、前川英樹、松尾羊一編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、
事務局 須斎恵美子

フォーラムのあとで考えていること 放送人の会 会長 今野 勉

地方局の現状報告

日韓中テレビ制作者フォーラムでは各国の放送界の現状報告がなされるのがならわしである。

今回の東京大会でも、日、韓、中それぞれの報告がなされた。その概要については本号でも別面で触れられていると思う。

日本の報告者である村上雅通さんは、地方民放局の窮乏ぶりをつぶさに語った。民放地方局が営業的に困難な状況にあることは以前から知られていたことなので、あらためてその現状を確認できた、ということなのだが、その後、地方局の制作者から、ドキュメンタリー番組の枠はあるのだが、制作予算はゼロで、ニュース番組用として撮影したものをつみ重ねて1本分のドキュメンタリーにしている、とか、インターンで働いた学生が、地方放送局のスタッフの長時間労働を目のあたりにして、入社試験に応募してこない、とかの話が聞かされた。

フォーラムが終わって、これらの話が私の胸の中で反すうされているうちに、私は、今までに感じたことのない、ある疑念にとらわれるようになった。

その疑念とは、地方局に限らず、民放を支えるものとは、そもそも誰なのだろうか、ということである。それは、局の経営者だ、とか、あるいは視聴者だ、とかいう話ではない。

民放を財政的に支えているのは、広告主である。つまり企業だ。そんなこと当たり前ではないか、と言われそうだが、私の疑念はそこから始まる。

真鍋博の問題提起

もう何十年も前のことだが、イラストレーターの真鍋博さんから、こんなことを聞いたことがある。真鍋さんは、ある民放局のある番組が好きで、それを支援しようといくばくかのお金を持つてその民放局へ行ったところ、視聴者からそういうお金を受けとる窓口はない、と断られたというのだ。

電波は公有の財産である。それを支援できるのは、公の一人である自分として当然のことだと真鍋さんは考えていたのだ。

公有の電波にお金を出して利用できるのは、広告主だけなのだ、ということ私たちは、日頃、気にもしない。民放とはそういうものだ、と納得してしまっている。私の疑念はそこに発する。公有の財産を利用する権利が広告主だけに認められているのなら、公有の財産である電波を公のために支える義務もまた広告主にあつて然るべきなのではないか。

誰が民放を支えるのか

それは妄想だ、と解つたうえで私は言つて

みている。そうとでも考えなければ、地方民放局がどんなに努力しようといふ番組を作ろうと視聴者に愛されていようと、広告料が入らないという理由で潰れるのを座して見ているしかないことになる。

民放もまた市場価値をめぐる競争に勝ち抜くしかないということ

話は地方民放局にとどまらない。すべての民放局は、リーマンショック時の広告費の減収から立ち直れないでいる。先日、ビートたけしさんがテレビで語っていた。制作費が安くなつて、テレビ離れが起つて、番組は無難なものばかりになつていふ。

民放だつて、ビジネスであるからには、市場価値が無くなれば潰れていくのは当然だ、と考えることもできる。しかし、私がどうしても腑に落ちないのは、広告主は好きな時に好きなだけ電波を利用できる権利があつて、出す必要がなくなればさつさと撤退してもいいことになつていふ、ということだ。

そういうものなのかなア、民放というものは、と、つい弱気になつてしまふ。そして真鍋博さんのことを思い出してみる。もう遅いかなア。

フォーラムの間、私はこのことについて誰とも話をしなかつた。

第17回 日韓中テレビ制作者

オーラム・東京大会・概要

開催 2017年9月24日(日)～27日(水)

会場 上智大学四谷キャンパス10号館

講堂

主催 放送人の会、上智大学メディアジ

ヤーナリズム研究所

韓国の主催団体 韓国PD連合会

中国の主催団体 中国電視芸術家協

会

協賛 JKA(補助事業、放送文化基金

国際交流基金、TBSテレビ、

テレビ朝日、フジテレビジョン、

TBS、BSフジ、BSジャパン、

「大山勝美基金」

協力 NHK 協力提携団体 放送批

評懇談会、放送番組センター

フォーラムの参加者

日本 109名

韓国 40名 中国 38名

計 1日平均150名が参加した。

作品テーマ 「田舎暮らしと都市と地方

の問題を考える」

フォーラムの日程等

日時 2017年(平成29年) 9月24

日(日)～27日(水)

9月24日(日) 中韓参加者来日

16:30 開会式

歓迎挨拶

今野 勉 大会会長

韓国代表挨拶 宋日准氏
中国代表挨拶 張 彦民氏
共催代表挨拶 音 好宏 大会会長
各国放送事情

中国基調報告 丁重平氏

韓国基調報告 宋日准氏

日本基調報告 村上雅通氏

18:30 歓迎晚餐会

ホテル・ニューオータニ「折り鶴・麗

の間」

9月25日(月)

9:00 開会

【番組の鑑賞と討論】

韓国ドラマ「被告人」 P チョ・ヨン

グアン氏

中国ドキュメンタリー「節氣と四季

折々・中国の知恵」 P 趙晨氏、安

宇氏

日本エンタメ「鶴と亀とオレ」 P 上

条剛正氏

13:20 交歓昼食会 上智学生食堂・

11号館

14:20 再開

韓国エンタメ「覆面歌王」 P ノ・シ

ヨン氏

日本ドキュメンタリー「島の命を見つめ

てく豊島の看護師・うたさん」 P

山下晴海氏、武田博志氏

中国ドラマ「三妹」 P 習辛氏、傅曉

陽氏、閻愛華氏

19:30 交歓夕食会

NOMAD・東京ガーデン テラス紀

尾井町

9月26日(火)

9:00 開会

【番組の鑑賞と討論】

日本ドラマ「絆く走れ奇跡の子馬」

P 浅野敦也氏、土屋勝裕氏

韓国ドキュメンタリー「青春、智異山に

暮らす」

P パク・ジョンフン氏

中国エンタメ「郷村の世界・広西忻城を

行く」

P 劉岩氏、吳驥氏

13:30 写真撮影 交歓昼食会

15:00 ソフィア・シンポジウム

「日韓中相互理解とテレビ・プログラ

ムの役割」

パネリスト

韓国 黄盛彬氏、黄應九氏

中国 王麗萍氏、王雲飛氏

日本 大山寛恭氏、数永信徳氏

モデレーター 音 好宏 大会会長

18:30 閉会式

大会総括 韓国 金学泉氏

中国 黄有福氏

日本 河野尚行氏

19:30 終了宣言 今野勉大会会長

20:00 フェアウェルパーティー

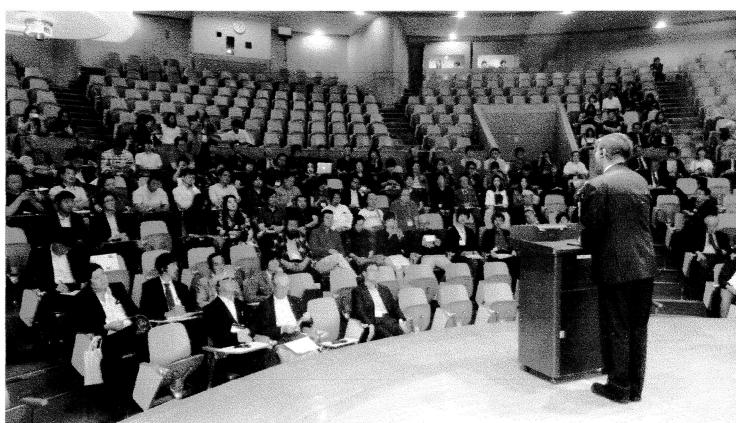
GUN・SHIP(ガーデンコート

4F)

9月27日(水)

エクスカージョン 東京観光

NHK技術研究所、フジTVなど



貴重な機会

テレビ山梨・PR部 岩崎 亮

「民間放送」の新聞の記事に目が止まる。

「日韓中テレビ制作者フォーラム開催」気になる。山梨で地域活性化に取り組み日韓国人を7年追いかけている制作者の私としては、行かすにはいられない。事務局からの資料をみて、さらに興味をそそられた。日本代表は山陽放送と信越放送の名作中の名作。これを見て中韓の方々がどんなリアクションになるのか。さらに気になる。

作品を見た後の討論は、予想以上に白熱した。日本の制作力の高さを感じたのか、鋭い質問が飛ぶ。私が一番驚いたのはドキュメンタリーを観て「脚本があるのか？あのシーンは何回撮りなおした？」という質問。国が違えば制作の仕方が大きく違うことが勉強になった。

中韓の作品で印象に残ったのは中国のドキュメンタリー「節気」。中国の若者の間で、「二十四節気」が忘れられているので、その教育目的に作られた番組だ。中国でさえ「二十四節気」が忘れられているという現実に愕然とした。そして、どの国でもテレビというのは、わかりやすく知識を伝えるというメディアの役割があるのだと実感した。

日韓中。政治的には問題を抱えている。しかしこのようなセミナーが、歴史を超え、未来にむけて、お互いがわかりあえるきっかけにもなると思う。だって、顔をみればみんな同じ国の人に見える。先祖はみんな同じだ。

まずは制作者同士がお互いわかりあえれば、その思いがテレビを通じて伝わるだろう。そう思えた貴重な機会だった。今後もぜひともこのような場を続けていただき、大勢の制作者が集うことを願っている。

関係者の皆さん、お疲れさまでした。そして、ありがとうございました。

フォーラムの醍醐味

オリコン・リサーチ 葛城博子

「日韓中テレビ制作者フォーラム」は、今回が初参加でした。まず、今回の作品テーマ「田舎暮らしと都市と地方の問題を考える」は、参加した3ヶ国ともに抱える共通問題であるため、いずれの作品も共感を覚える部分が多くあり、引き込まれました。

フォーラムの根底に流れるのは「異なる文化への理解」、もっと言えば「違いを尊重する」、なのだと思えます。そういう意味で考えれば、各国の参加作品ラインナップのチョイスから沿って的確に作品を選択した日本、バラエティー『覆面歌王』を差し込む韓国、そして中国70年代を取り上げたドラマ『三妹』を披露する中国。思わず、それら作品を選択した背景に思いを巡らせてしまいました。そして、観終わつた後に出た質問や質問の仕方、それに対する答えや答え方まで、各国の特徴が出ていました。3ヶ国で一緒に同じ作品を観て、感想を言い合い、時には意見を戦わせる…このフォーラムの醍醐味だと思いました。

最も強い感動を覚えたのは、信越放送や山陽放送のドキュメンタリーでした。地方局でこれほど力強い作品が制作されているとは…制作者の、そして局の矜持が伝わってきました。

最後に、学生の力を借りての「友好の場づくり」は、とても素敵なチャレンジだと思えました。「異なる文化への理解を深めるには、関心を持つきっかけ作りが必要です。異なる文化を楽しむ気持ちだが、きつと彼らの心に芽生えたのではないのでしょうか。

「違い」を越えて

加藤滋紀

日本が出品したドラマ「絆く連れ奇跡の子馬」の中にとっても印象的なシーンがあった。大地震による津波が引いた後、行方の知れない息子を、父が妹を連れて、息子の職場である馬小屋に探しに行く。そこで、瓦礫の合間からにゅつと出ている白い手を見つけ、息子の死を覚る。父と妹は、声も出さず涙も流さず、ただ呆然と立ちすくむ…。

日本人でも驚くほど抑制されたこの表現に、ともすれば激しい感情を露わにすることの多い韓国人と中国人がどう反応するのか、私は大いに関心をもって試聴後の討論を注視した。韓国の参加者からは「韓国では考えられない表現」との指摘があり、中国の参加者からは「文化の違いですかね」という発言があった。しかし、自分たちにならぬものとしながらも、日本人ならではの微妙な心の動きを理解し受け入れる姿勢が発言の端々に感じられた。

同じように、若者の多くが去った田舎に住む年寄りを描いた日本のドキュメンタリー番組とエンターテインメント番組でも、両国の参加者たちは、年寄りの微妙な心理を理解し、好意的に受け入れていた。

私は、フェアウェルパーティーで中国の女性の番組制作者と話す機会があったが、彼女は「日本の番組制作者は人の心の描写がとても上手い。中国で同じことが出来るかな？」と話していた。私は、その言葉を外交辞令でなく、本音と受け取った。

この度のフォーラムは、ともすれば違いや対立が目立つ日韓中の複雑な関係の中にあつて、違いを違いと認めた上で、互いの心を素直に分かり合えることを立証した貴重な機会だった。

フォーラムに参加して

信越放送 制作部 上條剛正

この度は、「日韓中テレビ制作者フォーラム」への参加という願ってもない機会をいただき、大変貴重な体験をすることができました。上映した「SBCスペシャル 鶴と亀とオレ」は、信州の田舎にUターンした若者とお年寄りたちとの不思議な関係を描いた娯楽テイストのドキュメンタリーですが、韓国や中国のテレビ関係者にどう映るのかとても興味がありました。質疑応答では「中国も農村の高齢化が深刻だが、番組に出ている元氣なお年寄りだけが事実か？」韓国は儒教の教えがあつてお年寄りを笑いのネタにするのは難しい」など活発な意見や質問が寄せられました。こ

の辺りは想像できる質問でしたが、「事前に脚本はできているのか」「演出はどう行っているのか」といった質問には正直どう答えていいか迷いました。お国柄もあるのでしょうか、「ヒューマンドキュメンタリーがないんだ」というのが率直な驚きでした。ただ、夜の懇親会でもいろいろ意見交換をしましたが、皆ドキュメンタリーを作りがついているという思いは強く伝わってきました。当番組が少しでも両国の番組制作の参考になれば幸いです感じました。

これまで「放送人の会」という名前を知ってはいませんが、放送業界で名を馳せた方々ばかりだけに私にとっては雲の上のような存在でした。今回、皆さんと会話をできたことが何よりも嬉しく誇らしく感じました。また、夜の「部屋飲み」までお声掛けいただき、皆さんの番組論を生で聞くことができたのも大きな収穫でした。今回のフォーラムを糧に、またこういった会に呼んでいただけるような番組を作っていきたいと思えます

中国のテレビドラマについて想う

工藤英博

初日の基調報告で中国の丁亜平さんは、自国のテレビドラマの状況について述べ、毎年15万話に達するよいドラマの大量制作は、今や世界NO1と誇らしげだった。一方で、今後はいかにしてクオリティを上げていくかが問題で時代のスピリッツを反映させて中国の文化を高めていきたいと……。そこでフォーラムの感想は中国のドラマに絞ってみた。

中国の出品作「三妹」は、毛沢東の死を受けて文化大革命が終結し、改革開放に転換した激動の1970年代から繰り広げられる大河ドラマだけに興味深かった。しかし、残念なこと膨大な話数は編集されてダイジェストになっており、ショーウィンドウを見せられていくようで完成度も出来栄もよく分からなかった。更には、現政権の安定をはかるためのプロパガンダの思惑が、ドラマの底に見え隠れする国策ドラマのような気がしてなうが、むなしさが辛く残った。

最終日のシンポジウムで中国のバネラー王雲飛さんが、3カ国は儒教・仏教文化、漢字文化、米文化など普遍性を共有している。私自身も共通点を頼りに韓国と共同制作したが成功しなかった。今後、共同制作を進展させるためには、それらの普遍性をふまえてお互いの国の特殊性・独自性を存分に生かしていくべきだろう。そうすれば、その先にヨーロッパの市場が見えてくる筈だ、と語った。このフォーラムに参加する中国の真意は、番組の共同制作や販売などの実利の場にしたという姿勢が発言からも改めて窺い知れて印象的だった。

フジテレビは昨年、中国の動画配信会社と共同制作した「不可思議的夏天」を中国全土に無料配信し、琉球朝日放送とベトナム国営放送がドラマ「遠く離れた同じ空の下」を共同制作し、今秋東京ドラマアオードのローカル・ドラマ賞を受賞した。こうした共同制作へのさまざまな挑戦がなされているようだが、立ちかはる困難を乗り越えて、海外との共

同制作が進展していくことを切に望む。

共通の基盤、多様性、共通の問題

隈部紀生

日韓中3国のフォーラムでは、これまでも文化基盤の共通性が感じられたが、今回上映された中国の「節気」は改めて共通性を認識させた。

しかし日本のドラマ「絆―走れ奇跡の子馬」については、東日本大震災の時、馬主の跡継ぎ青年が、子馬の出産を見守って、自分は崩れた建物の下敷きになって死んだ場面について意見が分かれた。日本の番組では、がれきの中から現れた手だけで表現し、父親をはじめ家族の泣く姿はなかった。韓国からは、「なぜ泣き叫ぶ場面がないのか」という質問が出た。日本の制作者は「被災者のことを考えて、あけすけな表現は慎んだ」と答えていたが、両国の表現方法の差は大きい。

「3国の共通性より、多様性を認識するべき」という意見も出た。日本は何かにつけ多様性が薄れ、画一性が目立つだけに、韓中両国との交流では、多様性を十分に意識する必要がある。

次に韓中両国では、日本よりテレビ番組をネットで見ることが多いだけではなく、テレビとネットのコンテンツの共同制作が進んでいる。それだけに会場では「このテレビドラマの原作は、ネット小説か？」という質問が飛び交った。三国で放送と通信による配信について、事情が違うのは確かだが、3国はともに放送と通信の融合という共通の問題に直面

し、関連する著作権問題にも影響が及んでいくことを感じさせた。

この点でフォーラムの最後に行われた「フィアシンポジウム」は、今後の方向の一端を伺わせた。

『共通感覚』

河野 尚行

1年を24節氣に分けて季節の微妙な移ろいを捉えるコンセプトがユニセフの「世界無形文化遺産」に昨年、登録されたとは知りませんでした。

日本同様、南北による寒暖の差が激しい中国ですが、黄河流域周辺の太陽の動きをもとに、太陰曆を修正し、農耕作業の目安になるよう、2000年以上前の戦国時代に、この「節氣」の暦は確立されたと中国CCTVの「節氣四季折々」は伝えていきます。

番組の冒頭は、季節の変化を捉えた美しい映像に、24節氣を詠み込んだ子供たちの唄が流れます。(立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨)。(立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑)。(立秋、処暑、白露、秋分、寒露、霜降)。(立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒)。春夏秋冬をそれぞれ6等分した24節氣。字面からくる感じでしょうか、小満、芒種などは実感が伴いませんが、あとは、私が18歳まで育った南アルプス山麓の農村の四季をたちどころに蘇らせてくれます。

更に1つの節氣を3つに分け、1年を72に区分けする72候になると、普段から俳句をたしなみ、季語に精通した人でないと、使いこなせないでしょう。辞書を引き引き72候を調

べ、なるほどと感心しました。

これらの季節の移ろいを言葉で確認し合う。その自然観は中国、朝鮮半島、日本の生活文化の古層に共通して流れています。儒教や老荘思想よりも根源的なものでしょう。——だが、PM2.5が空を覆い、コンクリートが地上を固める現代で、この季節感、自然観はいつまで生き延びられるでしょうか。

いくつかの感想

佐々木彰

恥ずかしながら、私は初めてのフォーラム参加で、以前と比較できませんが、皆様が語る通り、充実した内容の大会であったように思います。丁寧な同時通訳もあって、質疑応答も具体的で、中韓参加者の真剣な姿勢、熱気を感じました。参加作品も個性的でレベルの高さを知りました。

同時に、息子の死を知った父親の悲しみの感情表現などから、国民性の違いも改めて認識せざるを得ませんでした。「地方と都市」というテーマは誠に時宜にかなう設定でした。環境問題、老人問題等、現代の様々な問題に展開出来ました。日本の参加作品「鶴と亀とオレ」と「豊島の看護師うたさん」は、まさに表と裏の企画で素晴らしい選択でした。

つくづく思うに、日本人は、感情表現が抑制的で、私たちはそこに人間の心の深さやドラマの奥行きを感じるのですが、どうやら中韓では解り難いところがあるようです。ドラマ参加作品の「被告人」「三妹」もダイジェスト上映で、ストーリーを追うのが大変でした。

やはり、日本の「絆」のように、途中迄でも編集せずに作品の肌合いを感じさせて欲しいものです。

常にソフトの市場展開を図る中韓の姿勢を感じますが、逆に日本のドラマが海外で劣勢となる一因とも感じました。押しつけがましい程の明解さが、海外市場では必要かもしれない。

一方、シンポジウムでも、指摘されましたが、産業としての放送と、文化、ジャーナリズムの放送を混せて語ることも困難さも感じました。個人的には、若者たちのテレビ離れが、急激なデジタル映像表現の進歩によるメディア変革なのか、中韓の現状と合わせ考えたいかと思いました。

ソーン・イルジュン氏の挨拶に
「民主主義」を思う

菅野高至

この7月、大学の先輩から「小田 実没後10年の記念講演」が大阪である、一緒に行かないかと誘われた。韓国『緑色評論』発行人編集長のキム・ジョンチュル（金鐘哲）の「ろうそく革命」に関する報告も聞けるといふ。心動いたが、講演会の22日は放送人の会の理事会と懇親会に重なり行けぬまま、その件は忘れていたのだが、ソーン氏の挨拶「KBSとMBCのスト決行中！」を聞いて、金鐘哲の報告が日本語に翻訳されていたのを思い出した。

「韓国の私たちから見ますと近代以降今日に至るまで日本は下からの民衆抗争によって

政府を転覆させたことも、政権をかえた経験もない国です。そのため日本の民主主義はその実態が非常に貧弱した民主主義だと言えるかも知れません。（中略）真の意味での民主政府を立てようとする韓国人の戦いには、（一八九四年勃発の東洋農民戦争から始まる）100年を超える歴史があります」（訳：金亨沫）

中国のドラマ「三妹」を見て、閻連科（えんれんか）の小説を少しまとめて読まねばと思う。60年代後半、造反有理の文化大革命にひどく興奮した世代の一人として……。日韓中、今年また、アジア太平洋戦争の深い傷を思う。

韓国の放送人たちの熱い闘い

鈴木嘉一

韓国の3大テレビ局の一つ、MBCのソーン・イルジュンさんは、日韓中テレビ制作者フォーラムの常連メンバーだ。韓国を代表する調査報道番組「PD手帳」のディレクター、プロデューサー兼キャスターなどを歴任し、特派員として日本に駐在したこともある。日本語だけではなく中国語にも堪能で、日中の事情に明るく、独自の人脈を持っている。

そのソーンさんが9月24日、開会式後に行われた3か国基調報告で登壇した。公共放送のKBSとMBCの闘いを現在進行形で語り、日本の参加者間で大きな話題になった。

イ・ミョンバク、バク・クネが大統領を務めた9年間、両局は保守政権に近い人物が最高幹部として送り込まれ、報道内容も政権寄

りになった。バク前大統領の盟友チェ・スンシルの国政介入問題では、新興ケーブルテレビのJTBCがバク前大統領の疑惑を徹底的に追及したが、KBSとMBCはほとんど取り上げなかった。両局に対する市民の不信感が高まり、取材班はバク前大統領を弾劾する「ろうそくデモ」で締め出されたという。

韓国PD連合会の会長でもあるソーンさんは、保守政権時代に局の上層部が報道現場に加えられた圧力や処分、配置転換などを生々しく語ったうえで、KBSとMBCでは経営陣の退陣を求めて全面ストライキ中と報告した。「9年間の保守政権下で『報道の自由』は制限され、軍事独裁政権時代に逆戻りしてしまった。今回の闘いには、韓国の民主主義の起死回生が懸かっている」と熱弁を振るった。

政権とメディアの関係をめぐる問題は、日本の放送界にとっても切実なテーマだ。韓国の放送人たちの熱い闘いを聞き、「日本はどうなのか」と自問自答せざるをえなかった。

リアリティな3国の姿がみえてくるから面白い

放送ジャーナル・長谷川朋子

3国の制作現場のリアルな声が聞ける場所だ。番組流通マーケット取材を通じて、韓国と中国の制作力の向上を日頃から実感しているが、今回上映された韓国の作品にグローバルマーケティング力の高さを改めて感じた。番組に対する情熱と制作意図の説明や質疑応答の場面からも世界にしっかり売れる番組づくりをしていることも実感できた。中国はドラマ「三妹」を象徴するように中国らしい

演出表現とストーリーの独自性がいかにも、それでも勢いは感じざるを得ない。横並びで上映、討論するからこそ、リアリティある素の姿がみえてくる。だから面白い。韓国の状況が改善されることを祈りつつソウル開催を楽しみにしたい。

韓国のPDに送るエール

田中則広

韓国では2017年9月4日、公営放送（日本の公共放送に相当）のKBSとMBCの労働組合が5年ぶりの全面ストライキに突入した。労働組合側が公営放送の公正性や信頼を傷つけたとして経営陣の退陣を要求する一方、放送局の経営側は業務への復帰を対話の条件としたため、双方の交渉は膠着状態が続いている。こうした中、今回のフォーラムにはKBSやMBCのPDをはじめとする40名の韓国の「友人たち」が参加してくれた。2008年以降のイ・ミョンバク（李明博）、パク・クネ（朴槿恵）政権下では、公営放送のトップと政権との癒着が頻繁に取りざたされ、結果的には視聴者の信頼を大きく失うことになってしまった。しかし、フォーラムで上映されたKBSのドキュメンタリー「青春、智異山に暮らす」やMBCの音楽バラエティ番組「覆面歌王」を視聴した限り、経営陣はともあれ、番組制作の現場からは良質な作品を世に送り出そうという気概が伝わってきた。原稿の執筆時点（10月10日）に

おいてストライキはすでに1か月を超えており、長期化するのではないかとのも憂慮も出ているが、新政権が発足した今、1日も早く、物事が良い方向に向かうことを願っている。

「日韓中フォーラム」に参加して

千葉 邦彦

皆様、大変お疲れさまでした。今年度新入会員の千葉です。総務委員会の一員として活動しておりますが、今回、「日韓中テレビ制作者フォーラム」の一部をお手伝いする機会に恵まれました。事業計画として全てが確定し、実施に向けての最終段階に入っていた時期からの参加だったので、限られたことしかできませんでしたが、貴重な経験をさせていただきました。担当したのは、韓国・中国との間で事前に何度か交わした英文レターの作成、実施期間中の運営業務の一部、そして公式日程終了翌日のエクスカーション実施業務などです。

実は私、この種のイベントの運営に関わった経験が少しあります。NHK勤務時代に、「ABU（アジア・太平洋放送連合）京都総会（1994年、京都）、アジア番組ワークショップ」（2004年、バンコク）。そして、こちらはほぼドメスティックではありますが、放送文化研究所の「研究発表会・シンポジウム」、放送博物館の「文化講演会」などで、それらの経験に立ち、また、今回のフォーラムが上智大学メディア・ジャーナリズム研究

所との連携の下に成功したことを見届けたうえで、今後のために、運営に関して一般論を述べたいと思います。

細かい実務的なことは省きます。ひと言でいえば、大切なのは、「イベントの運営にあたっては、どんな小さな役割も、よく訓練されたプロフェッショナルが担うべきである」ということです。どのポジションにある者も、「現場で起り得るあらゆる事態を頭に描いて、そこで自分および他のプレーヤーが何をすべきかをシミュレーションし、必要な情報を的確に交換・共有しながら動き、いかなる瞬間も気を抜かない」というのは、番組制作と同じでありましょう。会員各位には釈迦に説法ですが、「指示があるうとなかるうと、なすべきことは自らする」です。指揮者（会員）の下、隅々までそれがきっちりとなされていることにより、参加者にもよい意味の緊張感が生まれ、イベントに大きな成果が期待できるのだと思います。一例ですが、会議通訳に、パネリストを凌ぐほどの見識の持ち主（11分かりやすくいえは、国谷裕子さんのような人）を立てることによって、よりスリリングで実りあるディスカッションが展開できるのではないのでしょうか。現段階で私はこのフォーラムの歴史的経緯について十分な知識を有しておりませんので、僭越ながら、上記のことをだけ述べさせていただきます。

さて、最後に私的なことを書きます。四谷には縁があります。半世紀以上昔に四谷大塚進学教室で勉強していた、四半世紀前は荒木町で飲んでいた、昨年は母（健在）の介護施設に通っていた、また、上智大学は姪（帰

国子女の母校であるといった縁です。また、この度の時間の流れで申せば、最終打合せのあった9月22日に息子が慶應の大学院に合格、23日は癌を克服した父が96歳の誕生日を迎えるという喜ばしい出来事があり、翌24日から26日がフォーラム、27日のエクスカーションでは、韓国からの方々を引率して、NHK技研とフジテレビを見学しました。楽しく有意義で、記憶に残る日々となりました。以上、私的なことを交えまして失礼いたしました。

ドラマパートの「報告

中町綾子

東京開催の日韓中PDFが終了した。日本の参加者の多くは宿泊施設は利用せず自宅からの「通い」参加だ。どうしても夜の活動は控えめになり、かなりまじめにシンポジウムに出席するよう心がける。とはいえ、期間中も外せない会議等やむをえず中抜けせざるをえない。なかなか難しい事情です。

というわけで、今年のドラマパートの日本からの参加者とは、私自身も上映時間の限られた時間のやりとりとなっていました。それにしても、各国からの感想、質問の多かったこと……。プロデューサーの土屋勝裕さん、浅野敦也さんにはそのひとつひとつについて丁寧に答えていただいた。上映作品「絆」をめぐって、感情の表現（感情のドラマタイズ）や、リアリティのあるカメラワーク、現実とドラマの距離感などが注目された。死を目の当たりにした時、人はどのように振る舞うの

か。これはアジア三国でも大きく異なる。その違いが表現されていることにドラマの価値がある。一口に言えば、日本の表現は控えめである。そうであることで、表現手法をこえてそこにいろいろな感情が表現されている。そして、それは国民性が違うからと言って共有されないかというところではない。「そういうもの」としてやはり共有されるのだと思う。

さて、最終日の夜の交流には、第12回(2012年)韓国慶州大会に「鈴木先生」の出品で参加したテレビ東京の山鹿達也プロデューサーがかけつけてくれた。尖閣諸島をめぐる日韓の間の緊張感が高まっていた頃で、そんな中で韓国の制作者と交流した。二人で韓国出品作の「被告人」のチョ・ヨンクアンPDの元へ。彼は、日本ではドラマの制作者が尊敬されていると言う。日本で開催された韓国ドラマのファンイベントで、サインを求められたり写真を撮られたりしたそうだ。

最後に、韓国MBSの女性プロデューサーが語る日本の好きなドラマは「半沢直樹」(TBS)と「砂の塔」(2016年、TBS、菅野美穂、松嶋菜々子主演)だった。「半沢」は2013年放送だ。「逃げ恥」ではなく「半沢」あらためて「半沢直樹」の全アジアの威力を思う。

刺激的な経験

深尾隆一

四日間フルに参加し、スタッフとして両代表団の動きもつぶさに観察しました。初めての経験でとても刺激的でした。

上映された作品自体十分に興味深いものですが、それ以上に感想や質問の中に各国の事情や感覚の違いが見られて面白かった。「何故息子の死に呆然とするだけの父親が生き残った子馬を見て初めて涙するのか?」

という質問をめぐる討論が一例です。表現の細部は、文化論の中でも国の事情を超えて話しやすい部分なのでしょうね。

「鶴と亀とオレ」に対する感想になると、もう少し韓中両国の現状との比較に踏みこんでいました。作品に登場する老人達の明るさに、羨望に似たものを感じていたようでした。バラエティには、私達がたどって来た道を見るようで、ノスタルジーを感じました。「広西几城を行く」が今の中国では視聴率が高いのです。視聴者とテレビの関係がまだ初々しい時期なのでしょう。

最終日にはNHK技研に同行しました。韓国の若い制作者達と一緒にでしたが、彼らの好奇心は強い。良いものは何でも採り入れたいという思いがひしひしと伝わってきました。ちよつと面白かったのは、8KHDRの素晴らしい画面を見て、「家に大型テレビを持っていない人も多いの、ここまで必要なのではないか?」というモバイルに慣れた世代の発言でした。説明員の苦笑が目に残りました。

羽田に向かうバスの中では、一人一人が興奮気味に感想を述べていました。大いに盛り上がり、中々の美声による歌まで飛び出して、少なくとも韓国の代表団には満足のフォーラムだったと思われまふ。

日韓中TV制作者フォーラムを終えて

藤久ミネ

これまでの17回のうちで、いちばん平和友好的でいいフォーラムであったと思う。特に番組上映後の討論に、質問や意見が各国から活発に交錯して、会場の雰囲気盛り上がりつつ。

「田舎暮らし」というテーマの設定も良かった。中国の「節氣」四季折々・中国の知恵では日中共通の節氣感覚がよく伝わってきたし、韓国のドキュメンタリー「青春、智異山に暮らす」からも共通の若者気が感じられた。最終上映作品「郷村大世界」(中国)では、これでもかこれでもかと、新車の名人芸が続々と登場し、日本が遂に勝つことができなかった日中戦争を戦い切った中国民衆の底力を見たような感慨に打たれた。

東アジア文化の多層化とその可能性
ソフィアシンポジウム「日韓中相互理解とテレビプログラムの役割」における論点

前川英樹

今回のフォーラムその中で、共同開催者である上智大学メディア・ジャーナリズム研究所の企画によるシンポジウム「日韓中相互理解とテレビプログラムの役割」についてレポートしたい。

このシンポジウムのパネリストからは、テレビ番組やデジタルコンテンツの市場分析や

共同制作についての期待、そして日韓中に続くアジア各国のデジタルコンテンツの活性化と人材育成などについての発言が続いたが、韓国延世大学出身で立教大学助教授の黄盛彬氏から以下のような鋭利な問題提起があった。個人的関心としても興味深いものがあるので、そこに焦点を当てることにする。

黄氏の発言要旨は以下の通りである(と、私は理解した)。

冷戦構造崩壊後、文化の領域では「文化帝國主義」(Cultural Imperialism)という現象が支配的になった。例えば、ハリウッド型のグローバルな文化構造がそれである。これに対抗して、各地域の文化の固有性を志向する動きが現れるようになった。これを「脱中心化」(Decentering)の中心に支配されまいとする動き。それぞれの固有の文化が、歴史的地理的に接近する領域で、近似性、類似性、共通性を基盤に相互に越境する現象が見られようになった。その典型がいわゆる「韓流」である。それは中国でも日本でも起きた現象だ。この現象は、その後日韓関係の変化により、政治的ナショナリズムを反映することになり、いわゆる「フジテレビ・デモ」という現象を生むようになる。

東アジア文化は儒教や漢字という共通性・類似性を持つといわれるが、そして確かにそのような構造はあるのだが、それは根源的なものではない。それらをア priori に前提とせず、また中心の分散化(多中心)として認識するのではなく、「文化の多層性」として捉えることで、そこからトランスナショナル(国家間関係)インターナショナルではなく、

国家を超えた関係」としての文化交流が可能になる。

多少牽強附会なところもあるだろうが、黄氏の問題提起は概ねこういうことだったと思う。

ここでいくつかの重要な指摘を捉え返してみよう。

1、脱中心の動きは多中心という傾向を示すが、それよりも「層」という概念でとらえること(多層空間としての文化)により、文化の共通性と個別性の関係をより構造的に理解することができる。

2、この「層」という概念を手掛かりにすることで、個別の文化を(日韓中などの)国家間の関係としてではなく、国家を超えた文化交流(トランスナショナル)として把握するという視点が成立し、そこに文化の創造性あるいは市場としての可能性・生産性が生まれる。

3、このように、いま個別と共通、中心と周縁など二項対立的なアプローチを超えて東アジアのメディア交流を実現する、そのための方法が必要なのだ。

さて、私の関心はその先にある。

ある地域の広がり(例えば、東アジア)文化を「層」として捉えることのプラス価値を評価するとして、近代社会の政治的単位が国民国家である以上、「脱中心」の力学はナショナルリズムと接点を結ぶことになる。この時、政治と文化は不可分であることが否応なく明示される。「韓流」が、日韓関係の中で別のベクトルによる行動につながってしまったのは、そういうことであらう。

では、私たち(放送という文化に関わっている者)には、その時どのような選択があり得るだろうか。政治が権力の行使として立ち現れる限り、それは文化を支配しようとする。それは善でもなく悪でもなく、権力とはそのようなものであるからだ。そうだとすれば、文化は政治から自立しうるかという一点に問題は収斂される。それは、輻晦でもなく逃避でもなく、東アジアという地域で生活し表現行為を背負った私たちが、その地域の歴史と地理の中で何に向き合うかの問題なのである。

その上で私たちの困難さは、近代社会という仕組みが、人間の共同性の放棄あるいは喪失の中から成立したことから、時として人々に激しい抒情を呼び起こすものだという点にある。厄介なことに、近代社会の表現行為は、しばしばこの抒情性＝浪漫主義として人々の心を揺さぶるのである。近代国家のナショナルリズムは、こうして浪漫主義と結びつき、「層」としての文化の歴史と地理を破壊しようとするだろう。私たちは、それを日本の近代化の中で経験したはずである。

私たちが、長い間に「層」として形成してきた文化の多様性と共通性を、どのようにして継承し、政治的行為に拮抗しつつ新たなコミュニケーション空間を創出できるだろうか。文化とは、そのような緊張感に晒され続けることで「文化」になるのであろう。黄氏の提言は、このことを強く感じさせるものだった。

6人のパネリストの発言とモデレーターの上智大学メディア・ジャーナリズム研究所長

音好宏氏の取りまとめを省略して、このように集約的にレポートすることを容赦頂きたい。

尚、フロアーから「日韓中の文化は共通性が強い。今や朝鮮半島の南と北の差の方が大きい」という発言があったことを付記しておきたい。その時、ほんの数秒の間会場に緊張が走った、と私は思っている。

記憶に残るいくつかの発言

■「9年間の保守政権下で、言論抑圧は軍事政権下の時代に戻ってしまった。ローソク革命で朴槿恵は退陣したが、その間に政府からテレビ局トップに任じられたものは、そのまま居座っている。テレビ局の組合はこのようなトップの交代を求め、言論表現の自由のために、番組制作を中断してストライキで戦っている。」(韓国代表挨拶)

■「日本のドキュメンタリーは取材者と対象者との距離がとてに近い。」(「鶴と亀とオレ」SBC、「島の命を見つめて」豊島の看護師うたさん)RSK)についての韓国からのコメント。確かにそう思う。この指摘は、日本の制作者にとっても大事な点だ。制作方法を客観的に見てみよう。ローカル局制作の佳作に出会うとほっとする。

■「文化大革命が始まった時は小さな子供だった。高校生の時に下放された。それがこのドラマにつながっている。」中国ドラマ「三妹」(文革時代化に始まる教師の話)。「文革はあなたにとって同時代の事か、過去の歴史的事件か。このドラマの企画するときの

スタンスとどう関係するか」という質問に対して。このドラマには「中越戦争」も登場する。

■「アジア」のデジタルコンテンツ制作では、ベトナム、インドなどの第二グループのレベルが急速に上がり、人材も育って来ていて、先行する日韓中に追いつこうとしている」シンポジウム「日韓中相互理解とテレビプロダクションの役割」での日本からの報告。

■「東アジアの文化の共通性はその通りだが、いま朝鮮半島の北と共通するものがない」シンポジウムでフロアーからの発言。会場は一瞬緊張する。

■「スマホでテレビを見る時代に、こんな大画面(8K)が必要とは思えない」NHK技研見学で、韓国メンバーからの発言。

日本からの2作品に感動

村上雅通

今回は2日目までの参加で、しかもDVDの受け取りを逸したため、6作だけの視聴になった。例年のことだが、日本からのドキュメンタリーは素晴らしい。「島の命を見つめて」豊島の看護師・うたさん)は4度目の視聴だったが、何度みても感動する。制作者の取材対象者への温かい視線が、私の心に染み入ってきたのだろう。「鶴と亀とオレ」に登場するのは豊島と同様、お年寄りだが、豊島とは真逆の明るい側面を切り取っていた。制作した上條Dは「僕が豊島を撮ったら、おそらく明るい面にスポットを当てるだろう」と話していた。どんな作品になるのか、両作品の

Dの部門を超えた対談も聞いてみたかった。中国からは「節氣」をテーマにした作品。映像は美しいのだが、タイトルにある「知恵」が伝わってこない。また、情報量が多いため一度見ただけでは理解できなかった。そもそも、この作品はドキュメンタリーと言えるのか、そんな疑問も湧いてきた。

ドラマは中国と韓国の作品を視聴した。中国の「三妹」からは、文革を含む70年代の中国の農村を垣間見ることができた。韓国の「被告人」は、韓国の社会状況を徹底的にディフォルメしエンターテインメントに徹していた。いずれのテーマも面白いのだが、両作品ともダイジェスト版でストーリーを追うのが精一杯だった。前後のあらすじは口頭で伝えていから、カットなしの1話をじっくり見てみたいと思った。

会場からの感想や質問も多く、とても活発なやりとりができたと思うが、可能であれば、制作者と膝を突き合わせてやりとりする場、例えば、夕食後に分科会を開くとか、そんな展開も考えてみたらどうだろう。制作者が共有する悩みなど、大きな会場では出てこない「本音」のやりとりが出てくるような気がする。

今回のテーマは「田舎暮らしと都市と地方の問題を考える」だったが、視聴した6作品でテーマに合致したのは日本からの2作だけだった。もっと、東アジアの様々な田舎を見てみたかった。エンタリーの条件に「話題作」はあるのだが、もう少しテーマに沿った参加作品の選定も必要ではないかと感じた。ただ、フォーラムの運営はスムーズで通訳

も翻訳も素晴らしかった。運営に当たられた実行委員の方々に心から感謝申し上げたい。

最後に、個人的な興味で恐縮だが、韓国の「覆面歌王」は掛け値なしに楽しめる作品だった。とにかく出演者たちは歌がうまい。韓国には歌のうまい有名人が沢山いるということも知った。一方、日本の歌番組では、このところ出演者の歌唱力の低下が気になっている。

そういえばオペラ界でも、このところ韓国人歌手の活躍が目立つ。「覆面歌王」を見終わった後、ちよっぴり寂しい思いも沸き起こってきた。

根付の鈴

吉田賢策

大好きな都はるみの「千年の古都」を聞いていると、歴史ある街並みが浮かび、歌詞に織り込まれた機械の音や根付の鈴の音が聞こえてくる。さて「四百年の新都」東京でのフォーラムでなにを味わい感じていただくか、それがロジ担当の役目と自覚した。

ロジ担当を命じられた時少々困った。イベント経験も管理部経験もなく、性格的にも不向きである。ところがそこにジャンヌダルクが現れた。イベントに通じ、その道の人脈も豊富、店も良く知っている。ジャンヌダルクに大いに頼りきった。ホテルは新都を象徴する会場隣接のニューオータニに。夜食も例えば新設の紀尾井町のレストランで。そのオーブンテラスでの、東京の夜景は天気にも恵まれ心地よい。あつという間にステークが無く

なったのは残念ではあるが、立席での会話の輪も広がったようである。

最終日は五輪新競技場建設地とNHK放送技術研究所、それに当初は銀座シックス周辺を予定し駐停車場も押さえていた。ところが初日の準備会議で、韓国の参加者からフジテレビとお台場一帯の希望が出る。幸い参加者のBSフジの方が迅速に連絡をとってくださり、スムーズに事は運んだ。実は会議で何回も足を運んだ局舎も球形展望台は初めて。不思議な望遠鏡で新都の過去と現在の光景を堪能する。最後に全員にお土産までいただく。その「根付の鈴」……いつも離れずに付きそしてお守りで日中韓のよき思い出の品となるろう。

フォーラム、もう一つの質疑応答

渡辺純史

今年の大会を企画するにあたって考えたこと(数年前前から考えていたことだが)は、上智大学との共催を前提に、このフォーラムに「若い力」を結果するとともに、これまで以上に質の確保を図ろうということであった。そのためには

- ①若い現場制作者、研究者の参加を増やし
 - ②中韓の留学生を中心とする学生通訳を用い、三国参加者間の対話の促進を図り
 - ③対話の基礎となる作品理解、質疑応答理解のためのローカライズ作業や同時通訳には、手間と金をかけてもいい。
- その理由は、

①日本の主催団体「放送人の会」自身の白髪禿頭集団からの脱皮したいと考えたこと。

②中韓、特に韓国からの要望「日本の若い制作者と交わり、刺激を受けたい」に応える。

③フォーラムからの直接の受益者は放送人の会ではなく、次代を担う若い放送人。彼らにフォーラムを経験してもらおうことこそ、放送人の会の役割ではないかという確信である。

④昨年JKAや国際交流基金に補助申請を行った際に「若い力の結集」というコンセプトが助成額の積み上げにつながったという実感がああり、その社会的期待にこたえる必要がある。

そのため、私は、前会報に、日韓中テレビ制作者フォーラム東京大会に若い力を！若い人の参加に向けて、会員の皆さんご協力ください！——と書いた。

結果はどうだったろう。

現場制作者の参加は、放送局、制作会社等の協力もあつて、横浜大会時に比べ大幅に増えたのは事実だ。今回、多くの参加者から指摘されたように、これまでになかった「活発な対話」となったのは、学生通訳、的確で見やすい字幕、正確で分かりやすい同時通訳という仕掛けに加え、この大会のテーマ「田舎暮らし」を意識して出品した日本の三作品の主人公が、田舎に暮らす若い世代の人たちであったことも、その理由となったのだろう。そして、それら議論の中から、各国放送事情についての相互理解も深まったことは確実だ。3国の基調報告等を通じて、放送、表現の自由はだれが守り、だれが勝ち取るものなのかと、はつきりと自覚する韓国のPD達、放送に加えられる、政府、自治体からの干

渉、あるいは便宜について疑念を持たず、いかにその便宜を利用するか腐心する、中国の制作者たち、そして万全とも見えた日本の放送制度体制が、格差社会の象徴とも言える地方から崩壊し始めていること、にもかかわらず、それを逆手にとつて、地方局が若い人を中心に頑張つて秀作を輩出していることが、改めて明らかになった。それらを伝える内容や表現は、まだまだ不十分ではあつても、これらは、参加者が耳をふさぐと思わない限り、その場に立ち会つた人間は、確かに見て、聞いたはずである。それぞれの国の考え方が違ふという前提としても、皆、その事実を知つた。私は、ここを重視したい。

私自身は、若い人に交じて対話の輪に入りたいと思つてしたが、期間中は大会進行に専念せざるを得ず、思いを十分に果たされずに終わったが、いくつかの対話の輪に加わり、感じたことがある。難しいことを抜きにして、番組という共通の「玩具」があれば、制作者たちは、国や立場の違いを超え、一緒に遊んで（＝学んで）いられる、ということである。輪の中で、語り合う人たちの顔は、皆明るかつた。

さて総括である。
ご存知の方も多いと思うが、実は、数年前から、フォーラムの今後の消長も含め、その方向性については、様々な議論を重ねてきた。論点は多々ある。各国で異なる様々な事情による参加者がフォーラムに期待するもの差異、経費負担のありよう、各国主催者の参加者に対する立場の違い等々。

今大会も、当初は、「若い力の結集」をコンセプトにしつとも、事務局のある千代田放送会館を会場にしてコンパクトな大会を目指したが、会場規模等の理由から、上智共催の話が持ち上がり、フォーラムの質と各国へのホスピタリティー優先、経費増覚悟の大会となつた経緯がある。それら経緯を含め、この会報における参加者からの報告や今後の外部他者による正直で否定的な検証等も含め、詳細にしたいうえで、年内には、今後の方向について、それなりの結論を得たいと思う。

以下、いくつかの余談を申し上げる。
フォーラム最終日、27日NHK技研での出来事である。恒例のエクスカージョンとして、単なる観光でなく、NHK技研見学を選んだのは、3国の若い制作者同士が、放送技術の先端を知ることによつて、放送の未来を共に話し合う機会ができるのではないかという思いからであつた。残念ながら、それは、中国や日本の制作者の不参加によつて果たされなかつたが、こんな風景を見ることになつた。一行は、ホールで、技研の研究内容のダイジェスト映像を見た後に、3つのグループに分けられ、いくつかのブースを順番に回ることとなつた。通訳二人では間に合わぬというところで、ひとつのグループは、韓国団長（韓国PD連合会長）の宋さんが通訳を兼ねた。各ブースには、若い研究者（いずれもNHK職員）が付き、自分の研究を発表する形をとつた。家庭内の8Kテレビ視聴の工夫、音声認識、顔による映像認識、手話CGの自動付与システム、ビッグデータなどをAI

によつて集積解析し、番組制作に生かすスマートプロダクション（番組制作支援システム）、アプリを利用したテレビの多重的楽しみ方の研究、テレビとネットワークを利用した、インタラクティブな視聴を実現するシステムなど、多彩なブースをめぐつていくうちに、不思議な空間にいる自分を発見した。宋さんの巧みな通訳の所為なのか、自分の好きな研究を一心不乱で行つていたのである。若い研究者の無邪気な熱意が伝わつた所為なのか、韓国の若い制作者との間に、お互いのプライバシーを明かしながら笑い合うような、極めてファミリアな雰囲気生まれたのである。そこには、フォーラムの作品発表と質疑応答とは、一味違つたもう一つの「質疑応答」が現出されていた。言葉の壁が外されたブースの中には、最後は、お互いのスマートフォンで、写真を撮り合う風景があつた。その空間には、日本人と韓国人がいるのではなく、ただひとつの「放送人」が存在していたのである。

たまたまであろう、フォーラム前日の23日、NHKスペシャル「総書記遺された声 日中国交45年目の秘史」が放送された。百花斉放を提唱し、文化大革命では危険分子として逮捕され、下放生活を経験しながらも総書記まで上り詰め、日中友好の旗頭として、日本の若者500人の訪中を実現させた親日家であり、その死が天安門事件につながつたという、元中国共産党総書記・胡耀邦が山崎豊子との4年間の対話で強調していたのは、日中間の絶えざる対話の必要性であつ

た。そして、偏狭な愛国主義は誤国主義に陥るといふ両国に向けた警星であつた。お互いの国民がお互いの国を嫌いとす、現今の歴史的にも異常な状況下において、放送を見ながら、明日のフォーラムは変わらぬに実施されるのだと、特別な感懐に襲われたものである。

そうして始まつた日韓中テレビ制作者フォーラム東京大会を終えて翌28日衆議院は解散された。国会の論議（Discussion）を嫌つての冒頭解散である。この稿を書いている10日、選挙公示の時点では一方的な主張を述べ合う演説（Speech）のみが国民に届けられる。ことを明らかにするにも、相手を理解するにも、コトバとコトバによるキャッチボール（対話）を軸に一つの論点について議論を尽くす討論に比べ、かつては演舌ともいわれた、反論なきところで、独り説を演じていく演説の、どちらが有効であるか、論を俵たないだろう。だが、ここ数年日本の現実には、理性的な熟慮を行うことを怠り、情緒的な声高で一方的な言い放しを受け入れてしまふ風潮を残念に思うのは、私一人だろうか。

こんな時期に、第17回日韓中テレビ制作者フォーラム東京大会が実施されたのである。



左・3国準備会議



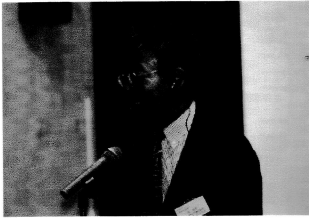
中・上智大学キャンパス



右上・バスで到着



右下・受付



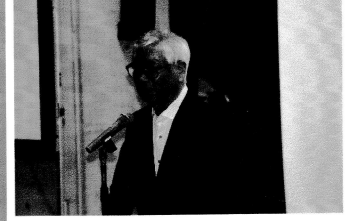
音 好彦 大会会長



張彦民 中国代表

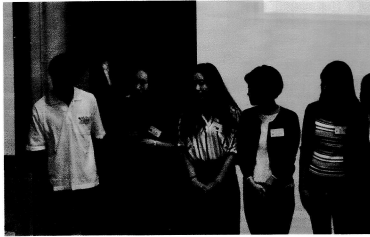


宋日准 韓国代表

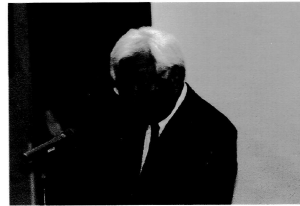


今野 勉大会会長

開
会
式
挨拶



通訳の紹介



日本・村上雅通氏

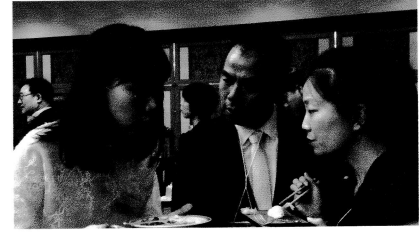


韓国・宋日准氏

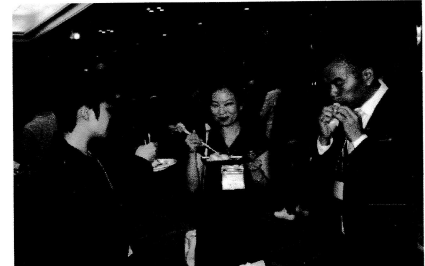
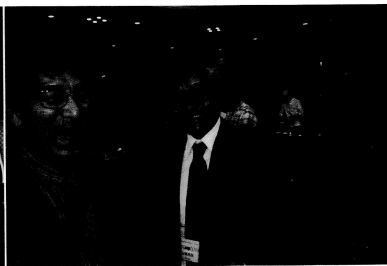


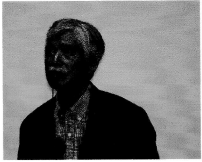
中国・丁晔平氏

各
国
放
送
事
情
報
告

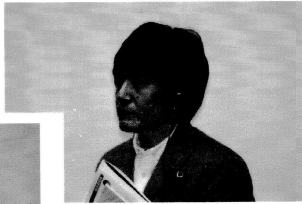


歡
迎
パ
ー
ティ
ー





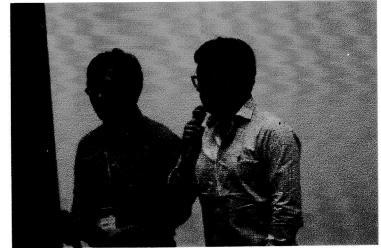
司会曾根英二氏



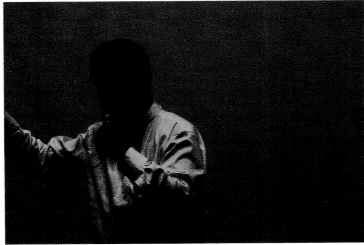
日本「鶴と亀とオレ」
P 上条剛正氏



中国「節季〜四季折々・中国の知恵」
P 趙晨伊氏と安宇氏



韓国「被告人」
P チョ・ヨングァン氏と司会宋日准氏



中国「三妹」
P 習辛氏

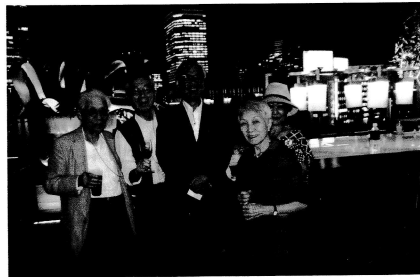


日本「島の命を見つめて」
P 山下晴海氏と武田博志氏

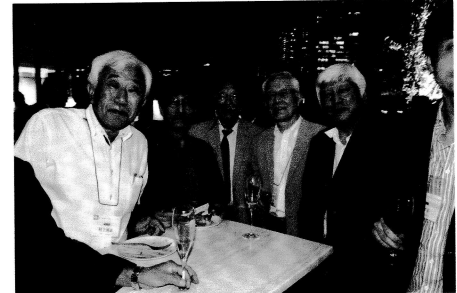


韓国「覆面歌王」
P ノ・シヨン氏

会場からの発言



交歓夕食会・NoMad
(ガーデンテラス紀尾井町)





韓国「青春、智異山に暮らす」 朴正焄氏



日本「絆～走れ奇跡の子馬」 左・浅野敦也氏 右・土屋勝裕氏



会場で

「KBS・MBCのストライキを支援」とある韓国のプラカードを持つ中国代表



中国「郷村の世界・広西忻城を行く」 左・劉岩氏 右・吳驥氏



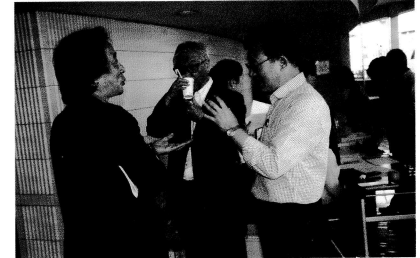
会場からの発言



同時通訳のブース



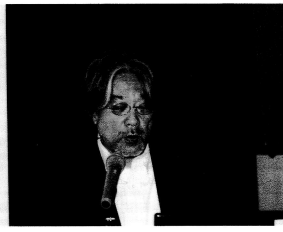
昼食(上智大学生食堂)



休憩時間のお茶



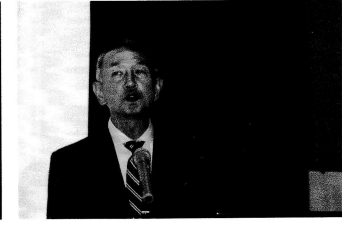
韓国・黄盛彬氏



日本・数永信徳氏



モデラー 音 好宏氏



上智大学学長・暁道佳明氏

シンポジウム
「日韓中・相互理解とテレビ・プログラムの役割」



日本・大山寛恭氏



中国・王雲飛氏



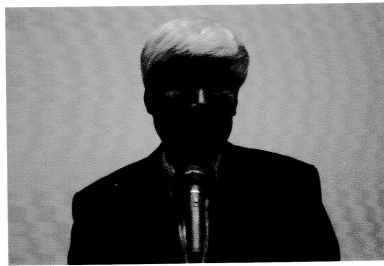
韓国・黄応九氏



中国・王麗萍氏



韓国・金学泉氏

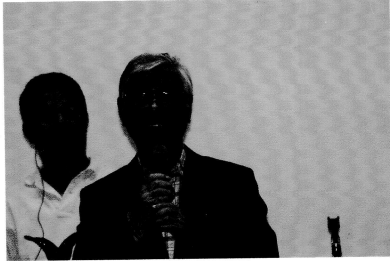


中国・黄有福氏



ソウル開催予定を伝える宋日准氏

閉会の言葉

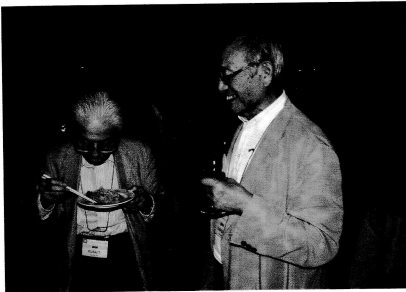


今野勉 大会会長



フェアウェルパーティー

Gun Ship (ガーデンコート4F)



第4日(9月27日) エクスカーション

都内巡り、NHK技研、フジTVなど



いろはに時代劇 (その式拾)

菅野高至

前回、はやぶさ新人が仕える根岸肥前守を演じた山口崇さんのつながりから、少年ドラマ「ちりめんじやこの詩」の話を書いたところ、ある方から、「菅野さん、時代劇を書いてよ」というダメ出しが入る。終戦直後の物語はもはや時代劇、朝ドラの「ひよっこ」も話題だし、と狙ったのだが、残念ながら話が面白くないので、時代劇に戻そうよということらしい……。

斯くして、話を時代劇に戻したいのだが、94年春「はやぶさ新八御用帖」の放送が終わる頃、僕は行政職員習としてMさんの手下になり、雑用係となつて、年に1本程度しか単発ドラマを作らなくなる。

それでも、「清左衛門残日録」のヒットのおかげで、94年初夏、編成から正月スペシャル版の制作を是非にと懇願される。だが、問題が幾つかあった。その一つは、使える原作がもう無いことだった。全くのオリジナルで話を作るのは、藤沢さんが許さないだろうし思い、まずは文藝春秋社の藤沢周平さん担当の編集者、萬玉邦夫さんに電話でそつと伺う。

「実は、使っていない短篇が一つ、『高札場』があります。藤沢さんご自身が目録を書けなかった、失敗だったと認めておられる作品ですが……」。

萬玉さん、顔も良いが声も良い。少し低音で甘く響く。「放送のおかげで、本の売上も伸びているし、正直に」相談なされたらいかがですか？ 案外、仲代清左衛門をもう一回見たいねって仰るかもしれませんよ」と言う。それで本当に大丈夫かな、と

疑いつつ、萬玉さんには折があれば、「菅野が相談」ことがある」と口添えしてくれるように頼む。

後に、萬玉さんは働き盛りで亡くなるのだが、今の今まで、彼は僕より年上だと思つていたが、今回、原稿を書くために改めて調べて見たら、僕より2歳も若いことが分かった。仕事上の上下関係ゆえに、僕は最初の電話から彼に敬語を使い、その落ち着きぶりに「藤沢さんが最も信頼する編集者」は年上であると固く思い込んでしまつたようだ。放送を生業としながら、活字に対する憧れというか、コンプレックスがあった……。

90年代には、僕はまだパソコンを使わないから、「検索」も知らず、「大木眠魚、萬屋玉堂」の名で本の装丁者だったことも知らなかった。忙しさにかまけずに、藤沢文学の個々の作品論を語る、贅沢な雑談目当ての会食をもつとしておけば良かった、今さらながら悔いが残る。ガンを患い、04年の秋、萬玉さんは50代半ばで亡くなってしまふ。彼は、永遠の文学青年だった。話を戻す。清瀬の藤沢さんのお宅に伺い、頭を下げる。

申し訳ない、ドラマにはならないと、一度は外した「高札場」を復活し、膨らまして2時間の正月時代劇を作らせて貰えますか？ オリジナルの要素が多くなりますから、原作表記は『高札場』より」とします。先生のお許しが出たら、脚本の竹山洋と一緒になりますので、いまは未だ、どんな展開になるか全く分かりません……頑張ります！と懇願。どつと汗が噴き出しました。

ひと間置いて、藤沢さんはあつさり、「正月時代劇、お任せしますよ」と仰つた。後

は、しばしの雑談から、「蟬しぐれ」のドラマ化の話をする。

「あれはね、駄目なんだ。NHKでやって貰いたいけれど、黒土さんが映画にしたいと頻りに頼まれてね、(映像化権を渡したから)」と、済まなそうに仰る。

萬玉さんに確かめると、「山形新聞の連載中から、黒土三男さんが映画にしたいと名乗り出て、『映像化はしません』と藤沢さんが何度断つても、諦めずに通い詰めて来るので、遂には藤沢さんが痺れを切らして、堪らず『うん』と頷いてしまい、『蟬しぐれ』の映像化権は黒土さんにある、と言ふことになったのです……」

この粘つた話は、後に黒土さん自身の口からも聞くことになる。

正月時代劇、二つ目の問題は、演出が変わる事だった。シリーズを演出した村上佑二はドラマ部に不在で、清水一彦は次期大河の「八代将軍吉宗」にかりきりだった。

上司が選んだ演出は、70年入局の同期生、吉村芳之だった。彼はそれまで全く接点が無かった。僕は赴任地の山口から75年に東京のドラマに上がり、AD修業からラジオドラマを経てドラマ人間模様班にいた。僕はまたディレクターだった。彼は赴任地の福井から大阪のドラマを経て、79年の夏、東京のドラマへ上がり、金曜時代劇班に入る。彼もディレクターだった。同期のライバル意識は勿論あったが、酒の飲めない僕は、酒を呑むとドラマを語り続け、酒が止まらなくなる彼に近づくことは無かった。

その後、僕は途中で大阪のドラマに行き、彼もNHKエンタープライズ21に出向したりして、15年の間、二人は交わらずに

正月時代劇で、初めてプロデューサーと演出の組合せで、仕事することになる。

79年頃、東京と大阪のドラマに、同期の桜は9人ほどいたが、15年経つて気がつくと、テレビドラマで生き残つたのは、彼と僕との二人だけになっていた。演出で唯一生き残りの吉村との初仕事は、清左衛門では少し申し訳ない気がした。演出の彼だけが一人、出ま上がった「清左衛門の世」に入つて来て、初めて触れるというハッピーを背負う。職人に徹するだけの面白味に欠ける仕事になろうとしていた……。

正月時代劇三つ目の問題は、小料理屋「涌井」の女将、みさ役のかたせ梨乃さんに撮影スケジュールが無いことだった。脚本の竹山さんに相談する。

みさは田舎に帰って嫁いだとしても、出戻りか何かで3シーズンぐらい撮れるといいなあ……脚本家は、かたせさんなら清左衛門とみさの恋ふたたびが直ぐにも書けるのに勿体ない、何とかなるでしょうと、僕を困らせて楽しんでる。

「涌井」を託して行った、いい女を誰にするか!? 先輩から教わつた鉄則がある。意中の役者がNGになった時は、小さくするな！ 代わりのキャストは大きければ大きいほど良い。大きい女優で、いい女……。舞台で座長を張る役者に声をかけよう。吉村が演出の楽しみを見つけれられる女優は誰だろう。

思いついたのは、大河ドラマ「花神」でシールトの娘イネを演じた、浅丘ルリ子さんだった。

(続)

第64回放送人句会

平成29年8月2日(水) 於：赤坂・麦屋

選者：星野高士

出席：伊藤親郎、近藤久二、佐々木光野、
新村もとを、西川阿舟、深尾一化、林備後
(8名)

不在投句：荻野慶人

兼題：油照、流星、南瓜、代役(業界用語)

【星野高士特選】

夕暮れに採り残されてて南瓜 もとを
かくも長き流星見たること不思議 阿舟

流星や八ヶ岳の峰々貫かむ 光野

流星やあれはあなたかも知れない 光野

脳天を押さへつけたる油照り 一化

風待ちの伊予の小港油照 備後

だしぬけに夜空引つ掻く流れ星 一化

着ぐるみに代役逃げる暑さかな 一化

【星野高士選】

油照り靴のねばつくアスファルト 一化

黒蝶釣られて口惜し油照 久二

鉄塔のペンキ塗り替え油照り 視郎

流れ星辞任解任不信任 慶人

この年になりて南瓜が好きになり 阿舟

油照り女は村に残されて 視郎

湯上りのやうに友来る油照 もとを

南瓜煮でこれが旨いと褒められて 備後

油照り少子高齢墓じまい 慶人

油照特攻遊きし御魂かな 光野

油照り記憶鮮やかきのこ雲 慶人

流れ星集めて剣生れけり 視郎

代役の受けのよろしき村芝居 備後
並天井南瓜で膏をかせぎをり 一化
突堤は背越しに熟し星流る 久二

声にする間もなく星の流れ消ゆ もとを

異次元に吸ひ込まれたる流れ星 もとを

星飛んでこれしかないよと決めた夜 一化

裏山の南瓜畑の逢瀬かな 視郎

今は亡き南瓜嫌ひのコメディアン 備後

戦争は終り南瓜を食うばかり 視郎

病床で南瓜食べたと言ふ妻 慶人

【会員互選】

キロよりも刃の似合ふ南瓜かな 一化

シロナガスクジラのゆくへ星流る 備後

夏の夜に草魚の代役踊る浜 久仁

山寺の屋根に詮なき大南瓜 備後

騎馬武者の 長に消え星流る もとを

幾十の水兵の遺影南瓜咲く 久二

流星や言葉にならぬ願ひせり 光野

代役の副校長で夏期講習 視郎

過疎の村原野に南瓜もと畑 光野

代役や醒めてくれるな夏の夢 慶人

【選者吟】

洛北の平屋の縁の油照 星野 高士

印伝の靴の底も油照

代役の出番待ちつつ南瓜煮る

亡き人の佛確か流れ星

代役に南瓜持たせてゐる場面

虚も実も顔を持たざる油照

置かれたる南瓜に風の素通りす

第65回放送人句会

平成29年10月3日(水) 於：赤坂・麦屋

出席：伊藤親郎、荻野慶人、近藤久二、
佐々木光野、中島文博、新村もとを、
西川阿舟、深尾一化、林備後(9名)

兼題：秋晴、秋刀魚、鳥渡る、二枚目(業界用語)

ひとしきり燃えて秋刀魚の焼き上がる

二枚目も火男となる里祭 備後

二枚目が老けて人寄せ秋の宴 久二

秋刀魚切る刃捌き巧し般若妻 丈博

月の出の遅き岬を渡り鳥 もとを

水平線大秋晴れに揺らぎなし 光野

焼きてなほ縮む今年の秋刀魚かな 一化

松茸も一枚目なれば値が張りが 備後

鳥帰る先を導く星の星 視郎

あこがれの東京の空鳥渡る 一化

二枚目やくちなしの唄十八番 阿舟

こんがり骨まで食はれ初秋刀魚 もとを

白神の撫林越え鳥渡る もとを

七輪で外で焼きたる秋刀魚かな 阿舟

聞き海秋刀魚よ眠れ鱧登め 久二

秋晴れて素足に軽き女下駄 丈博

斬られたる型の二枚目菊人形 もとを

水切りの石よく跳ねて秋晴るる もとを

もろともに痩せし秋刀魚を嘆きけり 久二

秋晴れを嗤ふことミサイルが飛ぶ 一化

明日からは老人ホーム秋刀魚焼く 視郎

湖晴れて富士を背に鳥渡る 阿舟

厨にて秋刀魚焼きたる煙かな 阿舟

秋晴れの横断歩道を老夫婦 慶人

またらばけ妻の笑顔の秋刀魚かな 丈博

渡り鳥夕陽ひとつを沈ましむ 備後

この夜を何処に休む渡り鳥 備後

渡り鳥去年の妄執追ひかけて 丈博

鉛筆の芯折れ白き秋残る 丈博

七輪のかなはぬ街の秋刀魚かな 一化

渡り鳥仮根の宿は喜望峰 慶人

二枚目の科白あやふし秋湿り 備後

蛇笏忌や謹厳にして二枚目と 光野

太刀持ちの太刀の如くに秋刀魚立つ 視郎

妻の留守焦がし焼きたる秋刀魚かな 光野

荒磯を鳥鳴き渡る天売島 もとを

藍深き海峡を鳥渡るころ もとを

二枚目も釣瓶落として奈落かな 慶人

もろともに痩せし秋刀魚を嘆きけり 久二

二枚目にも遊ばれて秋の花 久二

次回放送人句会

○平成29年12月13日(水) 18時頃から、
投句締切19時

○赤坂・麦屋(投句fax:03-3586-0056)

○兼題：鱧、狩、息白し、特番(スベシヤル)

(業界用語)

☆選者として星野高士氏が参加されます

ラジオのページ

「第4回ラジオ聞き酒の会」報告

ラジオプロジェクトが主宰する「第4回ラジオ聞き酒の会」を9月20日(水) 18時30分より新宿のビングエコー西新宿センター店で開催し10人のメンバーが参加しました。

今回は第54回ギャラクシー賞を受賞した2本の生ワイド番組を試聴しました。

1 「オールナイトニッポン」星野源

ニッポン放送制作(8月29日放送分)音楽ジャーナリストの高橋芳朗氏をゲストに迎え、星野源の最新作「Sincerely Song」についてマニアックなトークを展開。星野氏の音楽ルーツやレコーディング秘話など貴重なエピソードが満載の上質な番組との評価があつた。

2 「KBC長浜横丁」居酒屋清子

九州朝日放送制作(6月5日放送分)架空の居酒屋で女将の清子がお客(ゲスト)を相手に楽しいお喋りを聴かせる人気番組。この日の放送はギャラクシー賞受賞の報告という内容で受賞の喜びとリスナーに感謝の気持ちを伝えていた。試聴会後の懇談では今後聴いてみたい番組を参加者全員で広く情報を集めることを確認。さらに「放送人グランプリ」にラジオ界から必ず1枠は選ぶようにすること。その為にラジオプロジェクトの全員で推挙する人物を探していくことを確認しました。

(報告者:清水誠)

ラジオ人生半世紀

大沢悠里です

昭和39年、東京オリンピックの年に入社しました。会社へ入るとニュースを読まされテレビの中継、ラジオの中継をやらされ、ステレオを読みました。番組らしい番組をやるのは2年目からで、短い番組も持っていました。長いのは午後1時から4時半の「のんびりワイド」と30年やった「ゆうゆうワイド」です。「ゆうゆうワイド」がわたしのメインですね。

ナレーションはよくやりました。「ラジオスケッチ」、テレビの「これが世界だ」「そこが知りたい」など。わたしはテレビに顔を出すのが嫌いで、出ていない。街を歩いても振りかえられない。これはありがたいんです。顔を知られるのは困る。ちやほやされ、お店に入ると特別扱いされるでしょ。あれは困る。普通の店に入って友達と普通に飲むのがいい。

顔は知られてないのですが、声は知られています。タクシートの運転手さんに必ず言われます。なにしろわたしの声を毎日200万人の人が聞いていましたから、30年もやれば知られますね。

ぼくは遅刻が嫌いなんです。「ゆうゆうワイド」の30年間、毎朝6時にスタッフより先に入っていました。病気で2日ほど休んでいまずから無遅刻無欠勤ではありません。みんな「大変だったでしょう」と言うのですが、上を見ると気が遠くなっちゃうから、一段一段滑らないように登って、気が付くと7800段登っていたということですよ。

なぜやめたかというストレスでしようね。毎日のゲストのことは事前にいろいろ調べます。芝居を見に行ったり、DVDを見たリ、本を読んだり。ある程度その人のことを知っていないと失礼でしょう。ゲストは野球選手、水泳選手、画家など幅広いんです。本を1週間分読んで、前の日もう一度読み返してメモをとって、赤線引いて青線引いて頭の中に叩き込んで本番はそのメモを見ないでやつちやうわけです。終わったらすぐ忘れちゃいますが、これがストレスでした。

長くやっているとディレクターはどんどん若くなります。番組が始まったときまだ生まれていなかったのがいます。しかしラジオを一番聴くのはわたしの年齢に近い高齢者です。中小企業というより小企業の一所懸命封筒貼りをしている人、印刷している人など手仕事でテレビが見られないひとが聞いている。そんな人たちに送るのだからオープニングのコーナーから全部自分で仕込む。朝みんなが何を一番知っていたか、それから始める。北朝鮮のミサイルがどうなったか心配しているとき楽屋の話なんかしちゃいけません。

4時間半はやっぱ長い。しかも全部ナマです。いろんな方がいらつしやるでしょ。体の不自由な方もいらつしやるし、考え方も右から左、いろいろです。しかし万遍なく誰にでも合う放送というのは面白くないでしょう。その兼ね合いが難しいんです。言っちゃいけない言葉がある。ちよつとした一言が誤解されてとんでもないことになったりする。抗議の手紙はすいぶん貰いました。スタッフには封を開けるとい、自分で開けて返事

を書きました。手紙にはいろんなヒントがあるんです。「これは褒めてもらって嬉しいな」、「これは面白いな」、「こんな傾向だな」とか、つまりラジオはお客様とともに、お客様と一緒に作って行くものなんです。ぼくは聞いているひとに助けられたなあと、お盛りに立ってもらって、数字がどんどん上がって、トップの数字を取り続けました。支えていただいたスポンサー、スタッフに感謝しています。

ナマ番組は気取ってはいられないんです。化けの皮はすぐ剥がれます。30年、40年やるには裸で勝負するしかない。わからないものはわからないと言つ。「大王さん、これわからないんだよ」と言つと大王さんからメールが来るんです。知つたかぶりが一番いいません。教えてくれと言つと教えてくれるんです。「これはこうなんだ。ああなんだ」「そうなんだ」と言つて、番組はみんなで作って行くんです。

一つの企画は企画書通りにはできません。ある企画へのハガキの中から軟らかいものを選んで読むと、聞いたひとはまた軟らかいものを送ってくる。それを重ねて、声帯模写なんかやっているうちに一つのコーナーになつて行きます。2年か3年かかります。一方まじめなハガキも届きます。これを読んで、ほろつとすると「女のレポート」が始まる。という具合でまさにお客さんが作ってくれたんです。

「お色気大賞」はほくの物まねなど入れて、映像では現わせない、想像の世界のエロっぽさですね。軽く笑えるお色気です。くすつと笑って、病院で寝ている人でも楽しんでくれ

たらと思えました。ラジオの役目はそれで済むんだと思います。

番組を作るのは面白いです。いろんなコーナーを作っていくのは面白い。ぼくはラジオ番組のこと考えるのが好きなんです。「あれやろう」「こんなコーナーやろう」とか年中考えています。水を流して「カーン」という音にエコーをかければお風呂に入れるなど考えて、歌手なんかと「まあ、きれいな豊かなおっぱいですねえ」なんてやった。聞いたひとはみんな小柳ルミ子さんとお風呂入ったと想像しちゃう。「おおさわゆりのゆうゆうワイド」というような歌手に歌わせたり、アイデアを考えるのが好きでした。自分で考えて、自分の得意は何かと考えてやるからできるんですね。

わたしは声に特長があつて、ゆつくり話すでしょ。それがうるさくないと言われます。これは大事なことです。若いころは老成した声だと言われました。ニュースを読むと「おじさんが読んでる」と言われました。年をとって40、50になって話と声が合つようになつたんです。

やたらに怒るパーソナリティーもあつて、あれと同じように過激な発言をしつと、言われたことがあります。わたしにあればできない。穏やかな、温和なほうですから。誰かを叱るのに大きな声で怒鳴つても相手は納得しない。わたしも痛烈なことを言っているんですよ。それをやんわりと聞かせる。そこが大事なんです。

それから大事なのはチームワークです。スタッフから離れているパーソナリティーがいますが、スタッフと一緒に作る気持ちがない

くちやいけない。わたしは番組の最後にスタッフの名前を言います。あれは親戚しか聞いていないかもしれないんですが、あれを聞くとは親は安心するんです。名前言われたやつはまじめになつてくるんです。わたしは神輿にかつがれている方ですが、神輿をかつぐ方を大事にしなくちゃいけませんね。

また土曜日にやっていますが、いい番組を作らせていただいて、いい勉強をさせていただきました。長いことやっているとダメになつてくるんです。いいときにやめたと思えます。やめて1年半、全才風邪をひかない。穏やかになつた。20代、30代は人生という富士山への登り坂で家庭を作り、子どもを負ふ、働かながら景色も見ずに登つたわけですよ。50になって頂上に着いて、60まではまだ健康だし、子どもも巣立つて目出たいこともある。70越えると下り始めるんですよ。これからは病氣も始まるだろうし、転びやすくなる。そのときはスローペースでゆつくり、登るときは見られなかつた景色をゆつくり楽しんでみながら降りて行こう、そして麓まで行こうと。100歳が麓かどうかわかりませんが、下りを楽しみながら生きて行く。そんな風に考えています。

ゴルフはしないし、趣味はなくて、趣味はラジオで、旅行やドライブなんかもしていないのですが、最近は何、月、火とか2泊くらいでかみさんと近くの安いところに泊まつてのんびりしてきます。おいしいものを食べておいしいと思えばこんな幸せなことはないと思います。

まあ、ラジオは真心かなあと思っています。「人

情、愛情、みな情報」という言葉は自分で作った言葉ですが好きなんです。情報、情報、ニュース、ニュースと言っているけどそんなものじゃない。

先日電車に乗つたら、目の前でお化粧している子がいる。つけまつげを手入れしたりね。食事している子もいる。カップの中からエビチリを楊枝で刺して食べている。「親の顔がみたいですね」とラジオで言うとそのことで投書が来る。草花の話から綺麗に始める番組もあるけど、やはり人間臭い話がおもしろいじゃないですか。じゃあどこまで行けば電車のなかで飯が食えるか。大宮から先はいいか、津田沼から先はいいかな、空いてきたら立川から先はいいだろう、北は前橋まで行けば駅弁があるとか、これも話題になる。こんなやつて行きたいですね。

これからのラジオは大変でしょう。かつて若者が深夜放送に夢中になつたし、わたしの時代はお年寄りがラジオを聞いてくれた。今大工さんはラジオを聞かずCDを聞いています。ラジオはうるさくて、早口で何をいつているかわからないそうです。これからのラジオは考えなくちゃいけないでしょうね。

(聞き書き・伊藤雅彦)

ラジオとTVと私

寒河江 正

私は放送人の会「ラジオプロジェクト」のラジオ聞き酒の会」に2回目(2017年5月31日)から参加した。会場は東京六本木瀬里奈前のDUKE、参加者11名。その日は、今回「放送人の会」で優秀賞を受賞した東京F

Mの延江浩氏プロデュース「ポップ・デザイン」ノベル文学賞受賞番組「時代は変わる」。放送に至る経緯は「放送人の会」No.76に記されている。第3回(7月27日)は文化放送のアーサー・ピナードの「探しています」。

この作品は平成28年度日本民間放送連盟賞のラジオ報道部門最優秀賞を受賞している。アメリカ生まれで日本在住の詩人ピナード氏が日本各地の戦争体験者の声を聴くと云う内容で、この日は70分に編集したものを聴いた。参加者8名。私が感動したのは、番組の最後に登場した元零戦パイロットの原田要氏との対話だった。「真珠湾攻撃、本当はどうだったのか」とのピナード氏の疑問に、当時現場にいた原田氏の証言は「攻撃部隊の報告の中で、空母の姿は見えなかつた」「空母はいない」ということにピナード氏は衝撃を受ける。大きな空母は遠くに避難して戦艦だけを並べたのでは。原田氏の現場体験によつてピナード氏は疑問が解けたとも語っていた。私はこの時、かつて私が企画したtvkのテレビ番組「岸恵子の時代気分」(平成6年4月スタート、週1回30分、5年半続いた)のゲストに社会学者で東大名譽教授の日高六郎氏が語つた言葉思い出した。昭和42年(1967年)に起きた金大中拉致事件について日高氏自ら軟禁状態のソウルを訪問、激励したことの話を中心だったが、インタビュアーの岸恵子氏が体験を語ることに意味について問うと、「体験がもつ独特の語りは、一つの時代と人々に生気(勇氣と活気)を吹き込むことがある」。思い返せば放送界人生にはいろいろな出会いがあった。

私は首都圏のローカル放送局（よこはま）に生きて56年、具体的には昭和33年12月24日に開局したラジオ関東（現ラジオ日本）に13年（制作・報道、続いて昭和47年4月に開局したtvk（テレビ神奈川）に43年（制作・事業部、平成27年の3月で組織を離れた。振り返ってみると、私のラジオ番組の制作（ディレクター・プロデューサー）のうちに移ったテレビ番組の制作に大きく影響していたと思う。

一つはラジオ局入社の1年目、私の企画が日の目を見た番組「ダーク・ダックスのおしゃべりクワルテット」（1959年10月、月々金15分の帯番組）が採用されるまでにはいくつかの困難があった。（ダーク・ダックス：1951年慶応大学卒業の4人の男声で結成、ジャズ・ポップス・ロシアや日本の民謡など幅広いジャンルを唄いコーラスブームを起した。現在、発音当時のメンバーは遠山一氏一人のみだが今も活動している。）スポンサーは横浜高島屋。企画採用のカギを握るのは宣伝部。その部長のK氏がダーク・ダックスの先輩である。「ダークのおしゃべりは無理です。先輩の私が断言します」採用内定を営業部から聞いていた私は「オーディションを創ります。その上で判断ください」と当日のゲストは婚約中の高島忠夫、寿美花代さんのお二人。テーマは「花の都パリの魅力について」。収録後「いや、今月初めて4人のおしゃべりを聴いた。可能性ありだね」。なぜ私はこの企画にこだわったか。K部長を説得出来たのか。ラジオ関東開局の噂から設立するまでに入社前の準備期間と定めて、他局のラジオ番組を熱心に聞いた。音楽会にも足繁

く通った。ダーク・ダックスの演奏会もその一つ。幅広いレパートリーも魅力の一つだったが、それ以上にステージで交わす4人のおしゃべり言葉が実に洒落ていた。超満員の女性ファンがうなずきながら話に聞き入っている。

私は「ラジオ番組になる」と確信した。おしゃべりクワルテットは内容を変え私は13年間担当した。①歴史発掘と再発見の「ヨコハマ草分け百年史」②小学生の詩と人物登場の「ぼくと母さんとダーク・ダックス」③ダークの演奏旅行に合わせた「地方シリーズ」その後、タイトル変更11回、3人のディレクターに引き継がれ44年間8000回で終了した。

二つ目はなぜか私はスポンサーの宣伝部の方との縁があった。東京のデパート・パルコ宣伝部。当時関東甲信越のラジオ制作者（7、8名）が伊豆箱根に招かれた。「第一線のラジオ制作者の声を聞きたい」。その交流が一つの切掛になったのかは知らないが、洋酒のドッドウエルがスポンサーになって、インタビュー番組が実現した。ばばのうち「青春インタビュー」（1969年10月スタート、週1回30分生放送が原則）素顔の人間ドキュメントに焦点を絞り、打ち合わせは一切しない。この趣旨に賛成したゲストは画家・岡本太郎、詩人・寺山修司、作家・立川談志の諸氏延50人が登場した。更に、私には忘れられない思い出の一日がある。パルコの二周年を記念する番組の企画要請があった。私は即座に、「70年代若者の主張」（午前一時から六時まで徹底討論の番組）を提案した。昭和45年11月22日。テーマは①

日本は君にとつて何かの仕事をするこの意味③現代の風俗について④愛とはセックスとは⑤幸福とは。以上についてじっくり話し合おうという内容であった。ゲストは評論家・藤原弘達、元総評議長・太田薫、写真家・加納典明、評論家・依萌子の諸氏。尚、司会グループは総合司会に評論家・小中陽太郎、会社にニュースキャスター・有馬真喜子、タレント・北山修、FMカーインタビューア劇団変身・寺田征の諸氏。約400名を超える若者が集まった。会場はいやがうえにも盛り上がり、新聞各社、週刊誌等計12社の記者が明け方6時まで取材に立ち会った。

（元ラジオ関東・テレビ神奈川）

「落合恵子のラジオデイズ」いつもラジオがそこにあった

（NHKラジオ第一「祝日特番」を聴く）

田中秋夫

NHKのホームページでラジオ第一7月17日「海の日」の祝日特番「落合恵子のラジオデイズ」の存在を知り、当日の午前10時5分から1時間45分の生放送を聴いた。

今回聴いたNHKのこの番組はサブタイトル「いつもラジオがそこにあった」とあるようにリスナーからのラジオ番組の思い出話や、懐かしいリクエスト曲を中心に構成された番組で、ウディ・アレン監督の映画「ラジオデイズ」を連想させるノスタルジックなムード溢れる番組を想定して聴き始めた。そして、この番組を聴きながら4半世紀も

前に彼女が出演した番組に携わった文化放送制作部員の頃を思い出していた。

私は1970年代に彼女の出演する深夜放送「セイヤング」や帯番組「今晩は落合恵子です」の制作に携わり、彼女を身近に見てきた。特に「今晩は」は彼女の詩情ゆたかな語り口調と知的好奇心溢れる内容が評価され平日夜の看板番組となっていた。

あの頃、彼女はこれらの番組に出演して「レモンちゃん」の愛称で親しまれ、次第に人気者となっていた。当時の雑誌「深夜放送ファン」のDJ人気投票では常に月間第1位を占めるまでになった。さらにエッセイ集「おしゃべりな屋根裏部屋」や「スプーン一杯の幸せ」等、本の出版や自身の作詞による歌「昨日にさようなら」でレコードデビューするなど活躍の場を拡げていった。

今こそ女性アナのアイドル化は珍しくもないが、当時は局アナウンサーのアイドル誕生は大変珍しい現象で、文化放送社内は大いに盛り上がりがあった。

しかし、彼女は自身がアイドル的存在になっていくことに大いに悩んでいた。自分の実像と若いリスナーが勝手に作り上げたアイドル的虚像とのギャップに耐えられないように見えた。

やがてその虚像から逃げるように30歳を前に文化放送を退社する。

しかしその8年後、1986年秋に日曜夜の生番組「ちょっと待ってMONDAY」のパーソナリティとしてラジオに復帰した。この番組は対象リスナーを大人の女性として女性の視点でニュースや社会問題を考えるという硬派の情報番組で、制作陣も社内の女

訃報

松前洋一さん 8月4日死去。享年83
1933年生。58年電通入社。65年から
企画室に移り、テレビドラマのプロデューサ
ーとして活躍。「意地悪ばあさん」「木枯し紋
次郎」などを手がけた。

磯野恭子さん 9月22日死去。享年83
1934年生。59年山口放送入社。NN
NDキュメントの枠で「原爆体内被曝」「カ
ネミ油症」「中国残留婦人」など数々の秀作
を発表。ドキュメンタリーの女神と呼ばれた。
テレビ制作局長、常務取締役を務め、退職後
は若国市教育長を務めた。女性ジャーナリス
ト賞、国際ソロプチミスト女性援助賞、紫綬
褒章受章。

葛城哲郎氏追悼 戸田桂太
8月20日残暑の午後、葛城哲郎逝去の知
らせを受けた。去年12月大阪で、闘病中の
葛城に逢って話したのが最後になった。
その時彼は「故郷の村を撮りたいと思う
けど、もうちよつとムリだな…」と呟いた。
多くの傑作を撮影し、確固たる評価を得た伝
説のカメラマンの、やり残した仕事が生ま
れ故郷の村を撮影することだ」と聞いて、筆
者も黙って頷いたのだった。

ゲストコーナーの最後に本人の朗読でその
作品が紹介される。

「君の命より大切なものはない。生き
ぬかなければならない。死んではならない
が、殺してもいけない。だから今こそ！
もつともか弱きものとして、産声をあげる
赤児のように、泣きながら抵抗を始めよう
泣きながら抵抗をし続けるのだ。泣くこと
を一生やめてはならない。平和のために！」
ゲストが去った後再びリスナーからのラジ
オの思い出話と懐メロを紹介していく。そし
て番組の最後に「夏休みを迎える若い世代に
贈る」として金子みすずの「朝顔の蔓」と鶴
岡千代子の「雑草のうた」の詩2篇が朗読さ
れた。

そして番組ラストメッセージとして「私も
72歳になって思うことは自分自身で考える
力、情報を選びとる力をもつと伸ばそう。伸
ばしたいということですよ」と終わった。

確かにネットの時代になり、世界中でフェ
イク情報が溢れ、正しい情報を選びとること
の難しい時代に突入している。

その結果世界中で分断・衝突が発生してい
る。国内でも中韓に対するヘイトスピーチが
横行し彼女を「反日左翼」と決めつけるネト
ウヨが跋扈する等、時代の右傾化が止まらな
い。

彼女の「ラジオデイズ」は当初想定したノ
スタルジックなムード溢れる番組を超えて
今の時代に向けて警鐘を鳴らす等、活き活き
と発信を続けていた。

作詞家・作家なかにし礼さんが登場する。こ
の作品は「癌再発によつて生命の危機の中で
書かれた最後の小説」という。彼も「セイ
ヤング」の初代パーソナリティを務めた経歴
の持ち主で、文化放送との縁が深い人物であ
る。

番組は彼の作詞によるアン・ルイス「ダッ
バイマイラブ」、北原みれい「石狩挽歌」、石
原裕次郎「我が人生に悔いなし」等のヒット
曲をトークの合間に紹介しながら石原裕次
郎とのエピソード等作詞家としての体験談
から始まり、続いて少年時代の旧満州からの
壮絶な引き揚げ体験や貧しい戦後生活が語
られる。特に印象深かったのは敗戦直後、満
州牡丹江からの避難列車の話だった。ソ連兵
が迫る中、列車に優先して乗り込んだのは軍
人とその家族。次が満鉄の関係者。一般人は
最後で、乗れなかった避難民は我先に列車に
しがみつき乗り込もうと必死だった。この混
乱を鎮める為に若い軍人が軍刀を抜き乗車
した人々に対し列車にしがみつく人々の手
を無理やり引き剥がせと命令を下したとい
う。

当時6歳のなかにし少年も必死にしがみ
つく避難民の手を一本一本解いたという。そ
して残された人々の絶望的な顔はその後ト
ラウマとなつて彼の人生を悩まし続けてき
た。そして人生最後のこの小説で告白したの
だという。

彼はこの作品を発表する前の2014年
7月、安陪内閣による集団的自衛権行使容認
決議の直後に「平和の申し子たちへ」泣きな
がら抵抗を始めよう」という詩を発表し「若
者よ戦争に行くな」の呼びかけを行っている。

性スタッフだけを集めるといふ珍しい体制
だった。「女性社員は寿退社が望ましい」と。
いった暗黙のルールを持つ男性優位職場に
対する女性たちの反乱だった。タイトルの
「マンデイ」には「男の時代」の意味も込め
られ「男の時代よ待った」の意味が込められ
ていた。同年4月に施行された男女雇用機会
均等法も追い風になって番組は全国ネット
に広がった。この番組はスタート半年後に1
987年日本ジャーナリスト会議奨励賞を
受賞。翌年の1988年度に彼女は日本女性
放送者懇談会の放送ウーマン賞を受賞して
いる。

この番組「ラジオデイズ」はキャロル・キ
ングの1972年のヒット曲、「君の友達」
からスタート。曲をBGMに歌詞が紹介され
る。久々に聴いた彼女のトークは相変わらず
甘い声と優しい口調でゆったりと進行して
いた。

歌詞のナレーションに続いて彼女のフリ
ートークが始まる。「この曲を聴くと私は何故
かラジオというメディアを思い出します…」
確かに「ラジオは友達のように身近に触れ
合える存在」だと頷きながら聴く。

リスナーからのラジオにまつわる思い出
のメールを紹介していく。その合間にクリフ
リチャードの「サマーホリデー」やラジオオ
ドラ「笛吹童子」の主題歌等、懐かしい曲が
紹介される。

さらにトークでは「億総さんげ」「タケ
ノコ生活」「君の名は」等、終戦直後の社会
現象や流行語が紹介され、彼女の体験談も語
られる。

続いてゲストに小説「夜の歌」を上梓した

ドキュメンタリー・ワールド

「放送人の証言」LIVE
『人間稼業』としての

ドキュメンタリーづくり

日時：17年10月14日(土) 13時30分

18時00分

ゲスト：市岡康子(元NTVドキュメンタリー・日本映像記録センター)

聞き手：小池勝次郎(元NTV放送人の会)

上映作品：ノンフィクション劇場「多知さん一家(65年)、すばらしき世界旅行」「ギザロー」悲しみとヤケド(86年)

ゲスト：大治浩之輔(元NHK・報道記者)

聞き手：桜井 均(元NHK・放送人の会)

上映作品：ドキュメンタリー「埋もれた報告(熊本県公文書の語る水保病)」(75年)

総括コメント：今野勉(放送人の会会長)

場所：明治大学(お茶の水)・グローバルフロント2F(4021)教室

参加人員：50人



市岡康子氏



小池勝次郎氏



大治浩之輔氏



桜井 均氏



今野 勉氏

今回のドキュメンタリー・ワールドはテレビ草創期にドキュメンタリーの現場にいた、お二人の放送人に、代表作の上映を挟みつつライブで「放送人の証言」を再現しようという企画でした。牛山純一門下生の市岡さんの証言は12年2月、社会部記者の大治さんの証言は新しく、今年の6月。お二人のお話は熱く中味が濃く、ドキュメンタリー門外漢の私にはいづれも初見の作品で、たっぷり満腹の一日でした。(お二人の話の内容はHPにPDFでアップします)

以下、思い付くまま雑感を綴る。「多知さん」の放送は東京オリピックの翌年、昭和41年。四畳半に一家11人。母親43歳の笑顔は分かるも、父親51才は何処なのだ？ 狭い四畳半で良くもまあ、お励みになられたものよと、あらぬ妄想に多謝。この年、中教審の「期待される人間像」の間報告が出る。ウーマンリブはまだ来ない。そう言えば、多知さんの放送から40年余のお正月、厚生大臣が「女性は子供を産む機械」と言った……。

牛山さんが「すばらしき世界旅行」を発想したのは、ベトナム戦争に従軍した時だと言っ。「ベトナムの民衆の心を読み違えたアメリカのような誤りを、日本人にはさせたくない」、世界は多民族で色々な文化がある、何を喜びとして生きるか、世界の価値観はパラエティーに富むことを記録して伝えたいと思っただからだ、と市岡さんは語った。

調査報道の嚆矢とも言える「埋もれた報告」を、埋もれさせなかったのは報道部記者と教養部ディレクターという、NHK内の異文化育ちの組合せが成したものと、証言ライブの主宰者・桜井さんは言う。

大治さんは曖昧に答える「敵性証人」の役人たちを決して許さず、理詰めで追及する。相手が取材に応じて一度門を開けたら、絶対に最後まで食い下がる、ギリギリまで勝負する。そうしないと「義務違反」になる。水俣で取材した被害者、患者と家族たちに、私は義務違反になると語る。

公式認定から20年後、水俣に入った大治さんは記者として知らなかったことを恥じた。騒ぎが起きるとまるで間欠温泉のようにどつと押しかけ、問題は解決していないのにどつと帰って行くジャーナリズムは、ジャーナリズムでは無いと思っ知らされた。公害の場合は中立の報道なんてあり得ない、公正を踏まえた上の報道で、被害者に立つしか道は無いと断言する。

宇井純の『公害原論』と石牟礼道子の『苦海浄土』の記憶は遠く、市岡さんの作品も含めて、ああ、僕には予習が必要だった……。

(10月22日19時 菅野記)

新入会員紹介 (入会日順・敬称略)

沼田通嗣 (ぬまたみちつぐ) 62年7月生。86年テレパック入社。92年TBS「ルージュの伝言」でプロデューサーデビュー。テレビ東京「ラブレター」でATP優秀賞、東海テレビ「光抱く友よ」で文化庁芸術祭優秀賞、民放連優秀賞、昨年東海テレビの最後の昼下ラ「嵐の涙」を制作。

千葉邦彦 (ちばくにひこ) 51年8月生。75年経営管理要員としてNHK入局。予算編成に携わったのちハイビジョン特別プロジェクトに参加、霞が関勤務を経験。MICK O ニューヨーク現地法人、海外企画局、放送文化研究所などを経て、2016年までNHK放送博物館勤務。現在文筆業。雑誌にエッセイ連載中。

大沢悠里 (おおさわゆうり) 41年2月生。64年TBSアナウンサー9期生として入社。TBSラジオ「大沢悠里のゆうゆうワイド」ほかラジオ番組多数に出演。TBS TV「そこが知りたい」テレビ東京「クイズとこころ変われば」などいくつかのテレビ番組のナレーターも担当。91年からフリー。「ゆうもあ大賞」「日本雑学大賞」「放送人グランプリ2016特別賞」などを受賞。

木下浩 (きのしたこういち) 67年2月生。90年朝日放送入社。制作技術部、制作部(プロデューサー・ディレクター)、コンテンツ事業部。現在(株)フレタル。専門分野は商業教育テレビ史。

新山賢治 (しんやまけんじ) 53年8月生。77年NHK入局。大阪、神戸、東京局の報道番組のディレクターとしてドキュメンタリー制作に従事。Nスベ「驚異の小宇宙・人体」で科学技術庁長官賞、「核兵器裁判」でモンテカルロ映像祭優秀賞、「原爆投下10秒の衝撃」で芸術祭大賞、「東海村臨界事故被曝83日間の記録」でモンテカルロ映像祭大賞。09年制作局長、10年放送総局副総局長。13年NHK退職しNHKエンタープライズのプロデューサー。16年「ある文民警察官の死」で放送人グランプリ準グランプリ受賞。

岡室美奈子 (おかむろみなこ) 58年7月生。早稲田大学文学部教授を経て早稲田大学演劇博物館館長。専門分野・テレビ文化論、テレビドラマ論。現代演劇論。

日笠昭彦 光原朋秀 のお二人は次号紹介。

編集後記

▼日韓中テレビ制作者フォーラムが終わりました。やはり主催国は大変でした。会報には多くの方から原稿をいただきました。ありがとうございました。写真の撮影には深尾隆一さんが大活躍でした。ご覧になれば、フォーラムで活発な討論、交流が行われたことが読み取れると思います。▼中国代表の挨拶に陶淵明の名が出てきました。「采菊東籬下、悠然見南山」の詩句が有名ですが、単なる世捨て人、風流人ではないとかつて吉川幸次郎先生に教わりました。「田舎暮らし」のテーマで陶淵明の名がでてくるのがこのフォーラムの面白さです。▼夏の恒例座談会をとの要請を何人かの方から受け、北村美憲氏からは8月の番組について長文のメールをいただいたのですが、いろんな事情で座談会はできませんでした。来年のグランプリ下馬評座談会までお待ちください。(桐郎)

会員名簿

2017.10.27現在

- 【あ】 藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 秋田和典 秋山豊寛 天野證範 雨宮望 新井和子 【い】 池田正之 石井彰 石井ふく子 石橋映里 石橋健司 石橋冠 石原信和 磯智明 板谷駿一 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬 弥永子 【う】 上田洋一 上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 内山洋道 宇野昭 【え】 江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】 大池雅光 大川光行 大蔵雄之助 大沢悠里 大多亮 太田昌宏 大原れいこ 緒方陽一 岡野真紀子 岡室美奈子 岡本勉 小川治 小河原正巳 沖野瞭 萩野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】 加賀美幸子 各務孝 柏木登 片岡敬司 勝部領樹 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金沢敏子 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 河色厚徳 【き】 北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北村美憲 北村充史 木下浩一 木村成忠 【く】 工藤英博 久保志穂 隈部隆生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】 小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小林和男 小山紳人 近藤一男 近藤邦勝 今野勉 【さ】 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正 坂元良江 桜井均 桜井元 佐々木彰 佐々木欽三 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐藤幹夫 佐藤理恵子 佐野有利 澤田隆治 【し】 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水誠 志村一隆 下崎寛 下重暁子 白井博 新山賢治 【す】 菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木嘉一 須磨章 【せ】 清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】 曾根英二 【た】 高島秀之 高田宏 鷹森泉 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原茂行 【ち】 崔銀姫 千葉邦彦 【つ】 塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】 寺島高幸 【と】 東城祐司 堂本暁子 戸田桂太 外崎宏司 豊原隆太郎 【な】 長井展光 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中島由貴 永田浩三 永田俊和 長沼士朗 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村美美子 中山和記 並木章 【に】 新村もとを 西憲彦 西村与志木 西川章 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 【ぬ】 沼田通嗣 【の】 信井文夫 延江浩 【は】 萩原豊 橋本潔 林健嗣 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】 日笠昭彦 玄武岩 【ふ】 深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤田知久 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】 逸見京子 【ほ】 堀川とんこう 【ま】 前川英樹 牧之瀬忠子 増山麗央 松尾羊一 松平定知 黛りんたろう 【み】 三上義智 水上毅 水野憲一 光原朋秀 南讓 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鑣一 三宅恭次 【む】 村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】 本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】 八木康夫 矢口久雄 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】 横山英治 吉澤保 吉田賢策 吉村豪介 吉村直樹 【わ】 若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紀史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟